
銀色のおとしもの

岸 劉生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色のおとしもの

【Nコード】

N3807U

【作者名】

岸 劉生

【あらすじ】

源内に呼ばれからくり屋にやって来た銀時は、源内の発明品によつて異世界に飛ばされてしまう。飛ばされた場所はそらのおとしもの世界であった。智樹やイカロス達エンジニアに囲まれながら、コメディとシリアスに満ちた波瀾万丈の万事屋生活が始まる。

ちなみにニンフがまだ空のマスターから解放されていませんので、あしからず。

第一訓 そらのおとしもの

銀魂サイド

ある日の歌舞伎町。

この日はいやなほどに空が澄み渡っており、銀時は手の平で眼を覆いながら、頭上でさんと輝く太陽を仰ぎ見た。

まだ夏でもないというのに、この快晴ぶり……、熱いのが苦手な銀時は忌々しそうに舌打ちした。

「ったく、あちいな。こんな日に呼び出すたあー、源内のじじい、よほどいい発明品を作ったんだろうな？ もし最低な発明品を見せびらかしたその日には、あのクソじじいを炙り殺してやる……」

銀時は額から止めどない脂汗を流しながら、フラフラと覚束ない足取りで源内の店へと向かう。

熱い中を必死にやって来た銀時は店の玄関の戸をドンドンと叩いた。

しかし、返事がないので銀時は勝手に引き戸に手を掛け、ガラガラと戸を引き中へと足を踏み入れた。

「おい、源内のじじい。このクソ熱い中わざわざ着てやったぞ」

「ん？ おお、銀の字か！ ったくよお、中に入るならちゃんとノックしろって言っただろうが！」

銀時が入ったことに気づいたのか、源内は作業用のゴーグルを額まで持ち上げ、手に持っていた作業道具を机の上に置いて、銀時の方へと身体ごと振り向く。

「ああ〜ん？　ちゃんとノックしたつーの！！　てめえーがこんなクソ熱い中、ギャンギャンとドライバーを使ってるからだろーが！？」

「ああー、わりいな！！　銀の字、今ちょうど機械の再調整してたところでよ。今やっと終わったところでい。……ところで、あいつらは一緒じゃないのか？」

「ああ？　あいつらは『こんなクソ熱い中外に出られない。あんただけで行ってこい』だよ。全く、何つうー、強引な奴らなんだ。俺だってなあ、こんなとこに来たくなかったが、いつもてめえーには世話になってるしよお」

「がははははは！！　流石俺の見込んだ男だけのことはある。というわけで、この俺が作った『次元転換機01号発五郎フィーバー』を、一番最初に使わせてやるぞ」

源内のじじいがそう言うて奥から取りだしてきたのは、いつもの不細工な恰好の機械だが、唯一違うのは腹部の部分に大きな、そう開閉部分があり、大の大人が余裕で入れるくらいの……。

あれ？　なんかすごく嫌な予感がすんだけど……。

「おい、冗談だよな。あれ？　源内のじいさんよお？　今日ってエイプリルフルだったっけ？」

「はあ？ なに言ってたんだ、銀の字よ。暑さのせいで脳みそが腐っちゃまったか？ 俺は嘘は嫌いな主義なんでね、残念ながら大マジよ！！」

と、タラタラと冷や汗を流す銀時を思いっきり蹴り飛ばすのと同じ時に、手に持ったりモコンの赤いボタンをポチッと押す。すると、機械の腹部がパカッと開き、銀時の身体をすっぽりとその内に収める。

「おい！ 早く出せって！！ この俺を蒸し殺す気か！？」

「そういきり立つな、銀の字よ。本番はこれからよ」

必死の形相でドンドンと扉を叩く銀時をスルーし、源内は機械から数メートルほど離れて、再びリモコンを取り出し、

「さらば！！ 銀の字！！」

と、叫び声を上げながら青色のボタンを押す。

すると、銀時を入れた機械は激しく揺れ動きながら、ガタガタガタ、プシュープシュー、と派手に音を響かせながら稼働し始める。

「おい、こら、このクソじい！！ 何が、さらばだ！！ 早くここから出せ！！ 今なら三分の四殺して勘弁してやるからよお！！」

「……んなら出さねえーと」

この町の名前は空見町といい、何の特徴もない、ただ平和が売りのどかな田舎町だ。

この空見町に住む桜井智樹はボロボロの出で立ちで、目の前にいつものポーカーフェイスで項垂れている、ピンクの羽が生えた少女をガミガミと怒鳴りつけていた。

この少女の名はイカロスといい、空に浮かぶ“シナプス”というところからやって来た、エンジエロイドという智樹曰く“未確認生物”である。

智樹とイカロスはインプリンティングをしており、所謂主と使用人という関係である。もちろん、智樹は認めてないらしく、あくまで契約上の主従関係らしいのだが。

「ちょっと、智ちゃん。そんなに頭ごなしに怒らなくても……」

その様子をあまりに見かねたのは智樹の幼なじみである美月そはらといい、茶髪の髪をポニーテールにまとめ上げている美少女だ。

智樹はそんなそはらをキツと睨み付け、

「そはら！！俺はな別に怒りたくて怒ってんじゃないんだ！！ただイカロスにだなー、人間の常識ってやつをだなー！」

「フン、下等な地虫ダウナーの常識なんて、覚える必要ないわよ、アルファー」

と、横やりを入れてきたのは水色の髪をツインテールにまとめた、イカロスと同様背中に虹色の光彩を持つ羽根を生やした小柄な美少

女が立っていた。

「んな！ ニンフ！！ てめえー、いつからそこに！！！！ つか、学校は部外者立ち入り禁止だぞ！？」

そう、現在智樹達がいるのは学校の校庭で、今は放課後の真っ直中である。なので別にニンフが校内にしようが誰も文句は言わないのだが……、頭に血が上っている智樹にはそこまで頭が回っていない。

「……ニンフ、マスターに謝りなさい」

イカロスが目を赤く染めてそう言つと、

「フン、なんでダウンーなんかに。絶対に謝らないわよ」

ニンフは鼻を鳴らしてそっぽを向く。悪びれないニンフの様子を見たイカロスはプルプルと怒りに身体を震わす。

流石にここで“空の女王モード”^{ウラヌス・クイーン}になられては困るので、智樹は怒りを忘れて慌ててイカロスを取りなす。

智樹の努力もあつて、どうにかこうにかウラヌスクイーンモードの発動は防げた。

安堵する智樹であつたが、その代わりに何故ニンフがここにいるのか？ という疑問が頭の大部分を占めた智樹は、ご丁寧に我が校の制服を着ているニンフへと尋ねる。

「話を元に戻すけど、ニンフがなんでここにいるんだよ？」

「何って……、その……」

ニンフは智樹の質問に視線を逸らして言葉を濁らした。

まさか面と向かって、智樹を消してイカロスを回収しに来たとは言えない。

「だから、その、ダウンナーが通う学校とやらの興味があっただけよ
！！ 悪い？！」

仕方なく誤魔化すことにしたニンフ。智樹はニンフの剣幕に思わず怯むが、そうかと頷いて見せた。

「そうならそうと早く言えよな。てつきり、また俺を消しに来たのかと思ったぜ」

「えっ？」

ニンフは智樹の放った言葉に思わず目を丸く見開ける。

智樹はニンフから視線を逸らして、再びイカロスへの説教を開始する。

ニンフは智樹たちの姿を見つめながら、ギョツと服の袖を握りしめる。

（な、なによ。なんでこの私がダウンナーなんかのことで……）

ニンフはギリギリと歯を噛みならしていると、不意に背後から聞

き慣れた声が聞こえてきた。

「何を騒いでいる。智樹にその他大勢」

「放課後だからって、あんまり騒いでも他の人に迷惑でしょう？」

と、背後からやって来たのは眼鏡をかけた長身の男子と紫色の髪を生やした、涼やかな笑みを浮かべた美女が二人仲良く歩いてきた。

守形英四郎と五月田根美香子である。この二人は幼なじみであり、守形は学園一の“変人”と知られており、まして美香子は泣く子も黙る我が学校の生徒会長である。

釣り合わないこの二人組の登場に、智樹はあまり関わりたくないという風にこの場から逃げようとするも、その襟首をムンズと英四郎が引っつかむ。

「どこに行くつもりだ、智樹。お前には新大陸発見部の部員として、俺の企画に立ち会う権利があるというのに」

と、守形は眼鏡に手を添えてクイツと持ち上げ、眼鏡をキラリーンと光らせる。

「はあ？ 俺は別に部員になったつもりはねえーッスー！ 勝手に守形先輩が俺の名前を部員名簿に入れたんでしょーがー！！」

「ふっ、何を人聞きの悪い。お前も合意の上ではなかったではないか」

「嘘だー！ 勝手に記憶を捏造しないでくださいよー！！！」

「まあ、聞け」

と、智樹が喚くのを華麗にスルーして、

「俺が思うに新大陸は別にこの世界だけにあるとは限らない、つまりは異世界というモノが存在するのではないかと思うようになった」

「はあ？」

智樹は相変わらずの守形の変人ぶりに呆れた声を漏らす。

しかし、守形の発言は止まることなく、

「そこでだ。俺はこういう企画を思いつき、お前にも協力して貰おうと思ってな。こういうモノを用意した」

と、守形は智樹から手を離し、バツと懷から丸めた紙を取りだし、それを皆に見せるように広げた。

そこには……、『世界初！！ 臨死体験で異世界へGO！ ただいま勇気ある臨床希望者募集中！！』と書かれたポスターには、地面に横たわった智樹の身体から智樹の靈魂が浮かび上がる絵が描かれていた。

それを見た面々（イカロスを除けた）は呆然とした表情で守形を見つめる。あのニンフまでも守形の奇怪な発言にポカンと口を開いていた。

「ちょー！！ 先輩！ マジですか！！ マジに言ってるんですか！

？　つか、俺死ななきゃいけないんですか！?!？」

「まあ、聞け。一般的に人が死んだらあの世に行くと言われてるが、俺の考えでは死後に人の魂はこの世と違う別の次元に生まれ変わるとされている」

「はあ……。んで、それでなんで俺が死ななきゃいけないのか？」

「察しが悪いな、智樹。俺の理論を確証するために、智樹が仮死状態になって本当に異世界にいったのかどうかをだな……」

「あんたがやれ!!」

「何を言う。俺が死んだらどうやって確認するっていうのだ。これはお前にしか頼めないのだぞ、智樹」

「はあああああ!？」

と、ブチぎれた智樹が英四郎の胸元を掴みブンブンと揺する。

その光景を見つめながらそはらたちは、

「なんか相変わらずよね、守形先輩って」

「……私もあんな変わったダウンナーはトモキとスガタしか知らないわ」

「……（コクコク）」

と、話し合うのであった。

すると、不意に頭上から白く輝く光が落ちてきて、言い合いを続ける智樹と守形の上を通り過ぎ、
校庭の隅の方に墜落したのであった。

ドゴオオオオオオン！！！！！！ という激しい衝撃音が辺りに木霊し、智樹たちは何かが墜落した方に駆け寄った。

どうやら落ちた場所は砂場らしく、濛々とした砂埃が辺りに舞い上がり、智樹達はゴホゴホと咳き込んだ。砂埃が晴れるのと同時にある人影が砂場の上に大の字で寝ていた。

智樹たちはその光景を見て驚きに瞳を大きく見開けた。

砂場に寝ていたのは銀髪天パー、歴史の授業で見たような着物を身につけ、腰布には木刀を差している

男であり、男はウーッと呻くと、ムクリと上半身を持ち上げて、ガシガシと頭を掻きながら辺りを見渡す。

「あゝ、ここはどこだよ、まったく。あんのクソじじい。人を実験材料にしゃがって……。？ ああん、誰だてめえら？」

智樹は男の死んだ魚のような瞳に見据えられ、ビクツとその身体を震わせた。

「あ、あんたこそ誰なんだよ？」

「ああ？ 俺は……、あり？」

と、男が口を開こうとした瞬間、ブシュウウウ！ と男の頭から

第一訓 そらのおとしもの（後書き）

そらのおとしもの劇場版公開記念で作りました。ニンフのマスターは智樹じゃなく、銀さんです。そして、ニンフは最終的に銀さんの世界に行ってしまうかもです。

あつ、もちろん、イカロス達もたまに遊びに行きます。

第2訓 その男、侍なり

「俺の名前は、坂田銀時。侍だ」

智樹の家へと担ぎ込まれた男――銀時は、頭に包帯を巻きながら自分の名を名乗る。

智樹たちは銀時の回復力に驚きつつ、自分たちも自己紹介するこ
とにした。

「俺の名前は桜井智樹。一応この家の家主だ」

「……イカロスです。ここにいるマスターのエンジェロイドです」

「はあ？ えんじえ、何だつて？ つか、お前ガキの癖にそんなマ
ニアックなプレーしてんの？」

と、銀時は耳を穿りながらそう言うと、智樹は顔を真っ赤にして、

「ち、違いますよ！！ こいつらは人間じゃねえし、ほら！ 羽根
が生えてるでしょ！？」

傍らに正座するイカロスの腕を取り、ズズイと銀時にイカロスの
背中部分を見せつける。

しかし銀時はフツと鼻で笑い、

「おいおい、流石だな。SMプレイに天使ごっこか。お前将来強者
になるな」

「だーかーらー!!! そんなんじゃないんだって!!!」

と、銀時と智樹はギャーギャーと激しく言い合う。

それを見ていた他の面々は、

「あの智ちゃんとあそこまで張り合えるなんて、ある意味凄い人なのかも」

「……馬鹿ばっか」

「うふふふふ。面白くなりそうね」

「ふむ……」

と、それぞれに感想を述べる。

銀時は智樹との言い争いを止め、そはらたちに視線を向ける。

「そんで、てめえらは？」

「あつ！ その私の名は美月そはらといいます。智ちゃんの幼なじみです」

「……ニンフ。アルファーと同じエンジェロイドよ」

「俺の名前は守形英四郎。新大陸発見部の部長をしている」

「わたしの名前は五月田根美香子。一応生徒会長をしてるわ」

銀時はそれぞれの名前を聞くと、気になっていた単語を一番利発そうな守形に質問した。

「おい、眼鏡。前から気になってたんだが、えんじえなんとか何？」

「ふむ、エンジェロイドとはかの浮遊大陸の産物であり、唯一言えることは人ではないということだ」

「はぁん、あれか。お手伝いロボットのあれか？ にしても精巧にできてんな。俺がこの前やつつけたのに比べたらうんことケーキくらいの差があんじゃねーか？」

と、銀時はニンフの顔を見つめながら感心した風に呟く。

ニンフは銀時からの視線に思わず頬を赤く染め、つい照れ隠しで銀時の頬を叩き倒す。

「ちょ、ちよつと！！ ダウナーの分際で気安く見ないでよ！！！」

「いつてえええええ！！！！ ちょ、おいこら！！ なにしてくんのか？ 怪我人にその態度！！！！ 前言撤回！！ これならまだタマの方が役に立つわ！？」

「何よ！！ タマって！？ 事もあるうに猫と私を比べるなんて！！！！」

「猫じゃねーし！！ テメエらと同じカラクリだつーの！！！！」

と、互いに牙を剥き出しにグルルルと唸る銀時にニンフ。

そんな二人を諷めつつ、守形は銀時に再三話しかけた。

「銀時とやら、失礼ながらあなたはどの出身だ？ 俺の知る限りではその様な服装を着ている者は一般人にはいない」

「ああ？ 俺かあ？ てめえーが知らねえーのも無理ねえだろ。何せ、俺は異世界から来たんだからよお」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？

銀時の言葉を聞いた面々は思わずそう聞き返す。

「？ 聞こえなかったか？ 俺はこことは違う世界からやって来たんだよ」

銀時の話を聞いた智樹たちはしばらく開いた口がふさがらなかった。

なんとも理解しがたい内容だったからだ。

「ふむ、実に興味深い。それで銀時。銀時のいた世界とやらには天人という種族が人間の代わりに支配していると」

「ああ、ハグ、ムシャ。戌亥族に無理矢理開国させられちまってなあ……。ああ、あれは凄かったな。ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲。あれで我が国は一気に崩落よお。あれからよくもアグ、ハグ、ング、悪くも天人の文化を吸収して、

古き良き江戸は発達したというわけ。文化レベルならこの国以上だぜ、いつとくけどよぉー」

銀時はどこから取りだした1ホールの苺のケーキを頬張りながら、守形の質問に答えていく。

「……っか、そのケーキどこから取りだしたんだよ」

智樹は銀時が頬張るケーキを見つめながらそう呟くと、

「ん？ ああ、これが。てめえーの家の台所使って勝手に作った」

「はぁー！ー！ー！？ 何勝手に人の家の台所作って、そんな大作こしらえてんだよ！ー！ー！」

智樹はバンと勢いよく机を叩きつける。

「おいおい、なにそんなにいきりたってたんだよ。今まで隠していたが、俺は糖分を日常的に摂取しないと死んでしまうんだ。何せ俺は糖分戦隊のリーダーだからな」

「意味わかんねえー。何だよ、糖分戦隊って！？ 男はなあ、糖分よりもっと他に摂取せねばならんもんがあるだろうーが！ー！ー！」

「あぁん？ 何だよ、それは？」

フォークを口に咥えた銀時がそう尋ねると、

「ふふふ、そ・れ・は！ー！ー！ エロスでしょーが！ー！ー！ー！」

「……エロス？」

「そう！ エロス！！ スカートの隙間から見えるデルタ部分！！ 擦れあう太もも！！ 走る度に揺れる豊満な乳！！ 男にとつて一番大事なのはそう！！ エロス！！ これがあれば生きていく！！」

と、拳を握りしめて力説する智樹。

それを銀時は小馬鹿にした口調で言った。

「ケツの青いガキが何言ってるんだか。お前の言ってるのは全然エロスじゃねえーし。それは青少年の憧れだ。本当の女はなあー。そんなじゃねえーで。ストーカーはするわ、平気で人前でゲロ吐くわ、おばさんなのにネコミミ付けてるわ、もうマジありえねえーって」

それは特殊なのでは……、とこの場にいる全員が心の内でそう思った。

すると銀時は自分のケーキに注がれる視線に気づき、視線のする方向へと己の視線を向けると、そこには水色の髪を持つ美少女ーニンフが銀時のケーキを一心不乱に見つめていた。

「？ 何だ、このケーキ欲しいのか？」

「！？ ば、馬鹿にしないで！！ 別に、ほ、欲しくなんか……」

「まあ、そう言うなって。片面は口付けてねえーから。我慢は身体の毒だぞあーい」

銀時はニンフの手に無理矢理フォークを握らせ、ケーキの乗った皿をニンフに押しつける。

ニンフは戸惑った表情を浮かべていたが、すぐにニパアと輝かんばかりの笑みを浮かべ、銀時から手渡されたケーキを頬張る。

そして美味しいと呟いた後、勢いよくケーキを次々に口へと放り込む。

「あのニンフが素直に人から貰ったモノ食うの珍しいな」

「ねえ、いつもならダウナーのモノなんていらなんて言ってるのにね」

と、智樹とそはらがウンウンと頷き合う。

当のニンフは聞こえてないのか、夢中になって銀時のケーキを頬張っている。

「さて、と。それじゃあそろそろ俺はおいとまするかね」

銀時はよっこらせという掛け声と共に腰を上げると、玄関の方へと歩こうとする。

「えっ！？　どこかに行くアテがあるんですか？　銀時さん」

と、慌ててそはらが声を掛ける。

「ん？　別にねえよ。けどな、いつまでも厄介になるわけにはいけねえよ。まあ、ボチボチ帰る方法探して、あんのクソじじいをぶ

っ飛ばす！」

銀時はそれから壁に立てかけてあった木刀を手に取り、流れるような無駄のない動作で腰布に差す。

その姿は惚れ惚れするかのようなものであり、この場にいる全員が銀時に見とれていた。

「やっぱ、腰になんか下げてねえと落ち着くな。っと、そのガキ。ケーキが気に入ったんなら、また機会があったら作ってやるよ」

と、銀時は片手を上げて去ろうとするのを、意外な人物が引き留めた。

銀時の着物の裾を掴んだのは、あのニンフだったのだ。

「？ どーしたんだ、ガキ。何か用があんのか？」

銀時は己の着物の裾を掴むニンフを見下ろし、優しい口調でニンフに声を掛ける。

ニンフは銀時の裾を掴みながら、

「……傷が治るまでは、ここにいたらいいじゃない。トモキだって反対しないわよ」

赤く染めた頬を隠すように俯きながらも、銀時が出て行くのを止めようとする。

「……いいのか？ こんな見ず知らずの俺を置いておく義理はねえだろ」

銀時がそう言うと、智樹はフツと笑って、

「見ず知らずじゃねえじゃん。今、こうやって話してるんだから」

「い、いいのか？ 俺がここにいても……？」

智樹はいいぜと頷くと、

「それにニンフも懐いてることだしな！」

「なあ！！ 何言ってるのよ！！ このダウンナー！！ そんなんじゃないわよ！！」

と、ギャーギャーと叫びながらお互いを罵り合う。

そんな光景を見つめながら、銀時はフツと微笑む。

「それじゃあ、しばらくお世話になるっつー事で、一つよろしく」

こうして銀時はしばらく智樹の家で厄介になることになったであった。

第2訓 その男、侍なり（後書き）

続けて更新しました。ニンフ可愛いよ、ニンフ。
ただこれだけにつきます。

第3訓 ゲーム星人再び！！

ニンフの証言

そんなこんなで智樹の家に居候することになった銀時は、日がな一日ぼんやりとして過ごしていた。

そんで何故かニンフという羽が生えた未確認生物が、銀時の周囲をうろきよろし、時折興味深げに銀時の顔を覗き込む。

いい加減それが疎ましく思った銀時は、

「おい、いい加減にしろよ。えーと、名前なんつつたけ？」

「ニンフ」

「そう、それ。毎日毎日俺の周囲をうろちようちよして、気になつてしょうがないんですけど。何、俺になんか用でもあんの？」

ニンフは銀時の質問にしばらく黙考すると、

「ねえ、あんたって大人のくせに何で一日中家にいるの？」

淡々と実にストレートに直球な言葉が、銀時の心臓にグサグサと突き刺さった。

「な、なにを言ってるんだね、ちみは。銀さんは大人じゃありません。ちよつと股に毛が生えた大人です」

と、白々しく嘘を言う銀時。その証拠に目が、死んだ魚のような

目が泳いでいたのだから。

「ふ〜ん、大人じゃないなら何で学校に行かないの？」

「えっ！？　そ、それはだなぁ……。俺は実はちょー天才で、学校に行く必要がねえんだよ」

口を濁してブツブツと呟く銀時に、ニンフはジト目でそんな銀時を見つめ、

「要するにあんたはニートってことね」

「ニツ！……！！！」

歳場もいかない少女から放たれた毒舌は銀時にトドメを差し、銀時はしばらく放心状態のまま突っ伏していた。

流石のニンフも銀時が動かなくなったのが気になり、恐る恐る銀時の顔を下から覗き見ると、

そこには紅く煌めく瞳を持った銀時がギロオリとニンフの顔を、これまで見たことのないような恐ろしい形相で睨みつけた。

「ヒッ！……！！！」

ニンフはあまりの恐さに小さく悲鳴を上げて、ペタンと地面に尻もちをつく。

「フ、フフフ。どうわーれがニートだって？　この銀さんが本気だしゃなあー、仕事なんかすぐ見つかるっての！！！」

銀時はユラアリと幽鬼のように立ち上がると、目を爛々と光らせながら玄關の方へと歩いていき、そしてこの日はとうとう智樹の家に帰ってくることはなかった。

「と、言うわけなのよ」

ニンフは新大陸発見部の部室に制服姿にやって来て、何故今日の朝銀時が智樹の家にいないのかに至った経緯を説明し終えると、ニンフとイカロスを除いた面々は銀時に深く同情した。

「お前な、何もそんなにイジメルことないだろ……」

「んなつ！！ 私が悪いっていうの！？ 本当のことを言っただけじゃない！！」

智樹の責める言葉にニンフは若干顔色を変えて反論する。

「あのな……、そりゃ俺も思ってたけどさ。少なくとも銀時は怪我人なんだし、仕事がねえのは仕方ないだろう？」

「……でも、私は悪くないもん」

ニンフはしゅんと表情を曇らせて頷く。

それを見た智樹もこれ以上ニンフを責める気にはなれなく、そうこうしているうちに一時間目を告げるチャイムが校内に鳴り響いた。

さてさて、一時間目の国語が始まるうとしていた智樹のクラスでは、なかなか担当の先生が来ないという事態を迎えていた。

「智ちゃん。今日の先生遅いよね？　いつもならチャイムと同時に入ってくるのに……」

そはらがコソコソと智樹の耳元で呟くと、

「ああ？　別に俺は来なくてもいいけどな。授業が潰れることにしたことはないし……」

椅子の背もたれにだらしなく背を預けながらそはらに返す智樹。

智樹の後ろにはイカロスにニンフが、さも当たり前のように腰かけていた。

イカロスとはかく、ニンフは関係なのだから家に帰らないのかと尋ねると、

「いいじゃない。せつかく来たんだから授業とやらを受けて帰るわよ」とのこと。

しかも、クラスの奴らも平然と受け入れやがって。

普通おかしいだろ！！　羽が生えてんだぞ羽が！！

智樹が叫ぶも相手にしてもらえず、それを思い出した智樹が寂しげにルルルと呟いていると、教室の前扉がガラガラと音を立てて開き、同時に聞き覚えのある声が室内に響いた。

「おゝい、席に着けよ……、って、もう着いてんのか」

教室に入ってきたのは、なんと昨日から行方不明だった坂田銀時であった。

しかし、いつもの変な服装ではなく、カッターシャツに白衣をはおり、ブカブカのズボンを履いている、いかにもどこぞの理科教諭の姿をしていた。おなじみの健康サンダルをペタペタと鳴らしながら、銀時は教卓へと上がると、いつもの死んだ魚のような目でグルリと教室内を見渡す。

「えーと、今日からこのクラスの国語を受け持つことになった、坂田銀時です。教師になろうと思ったきっかけは家にいる未確認生物にニートと言われたからです。以後、よろしく」

と、淡々と自己紹介を終えると、クラスの名簿を開こうとする銀時。

そんな銀時をクラスメートはポカンとした表情で見つめるも、ただ一人だけ銀時に向かって口を開くものがいた。

そはらである。

真面目な彼女はどうしても銀時がここにいる理由が知りたく、その原因を突き止めるべく行動に移したのだ。

「銀時さん!!」

「ん？ おお、胸のでかいガキか。てめえもここの生徒だったのか？」

「そんなことはどうでもいいんです！！ 前の国語の先生はどうしたんですか！？」

「ああ、前の国語の先生は産休です」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？

「あ、あの前の国語の先生って男の先生だったんですけど……」

おずおずと大人しめの女子生徒が手を挙げてそう返すと、

「あり？ なんだなんだ、おめえらそんなこともしんねえの？ 最近はあるだ。男でもガキが産めるんだよ。俺の地元じゃあな、男も女もガキ産んで仕事休んでんだよ」

自信たっぷり言い放つ銀時を見て、クラスメートたちはこの人は頭がおかしい！！ と悟った。

「ってなわけで、授業はじめぞー。あ、イチゴ牛乳切れたな……」

と、放心状態の生徒を置き去りに授業を始めようとした銀時だが、傍らのイチゴ牛乳のパックが空になったのに気付くと、チヨークを手に取り、

カッ、カッ、カッと黒板に字を書き、【自習ッ！！】と大きくその二文字が黒板の真ん中に記されていた。

「つーわけで、俺はイチゴ牛乳を買いに行くので自習ということじゃあな」

手を振りながら再び教室を出ていく銀時。

まるで嵐のように入り去っていた男、坂田銀時は智樹のクラスに衝撃をもたらしたのであった。

その放課後、イカロスに命じて銀時を新大陸発見部に連れてこさせ、何故こういう経緯になったのかを銀時から直接問いただそうとした。

銀時は捕まえる際に逃げた出したため、イカロスによって荒縄でグルグル巻きにされていた。

「それで、どうやってこの教師になったのか説明してくれないか？ 銀時」

守形がキラーンとメガネを光らせながら銀時に近づいていく。

銀時はブスツと無然とした表情を浮かべていたが、やがて観念したふうに口を開いた。

「はあ、メガネには勝てねえーなあ。いいだろう、俺がどうやって教師になれたかを説明してやろう」

回想

『はあ、勢いづいて飛び出してみたものの、どうすりゃいいんだろうな……。前みたいに万事屋でもやるか？ ああ、でも金も人手もないし、当分は無理だな』

俺は夜の人通りの少ない道をブラブラと歩いていると、急に頭上から淡い光が降り注ぐのに気付き、面を上に向けると、そこには黄色の円盤が……。

「つて！！　ちよつと待ってい！！！！」

銀時の話を聞いた智樹はバンッと勢いよく机を叩き、銀時の語りを中断させた。

「おいおい、何だよ。チビ助。せつかくいいところだったのによお……」

話を中断させられた銀時は不機嫌そうに呟く。

「な、何って！！！！　そんなアホな話あるわけないでしょ！！　何っすか！？　黄色い円盤って！！　またデタラメ言って場を濁そうとしてるんでしょ！！」

「何をやぶから棒に。人を疑うなってかゝちゃんに言われなかったか？　疑うのは俺の話を全部からにしろや」

回想 2

気付いたら俺は円盤に吸い込まれて、変な黄色スーツを着たおっさんみたいな宇宙人に捕えられていて、あれ？　これは夢だよね？　これは夢だよね？　と俺は普段信じてもない神に祈るも、現実とは非情であることに変わりはなく。

おぼろげに宇宙人の会話を聞いていると

『なあ、兄ちゃん。こいつのピーをさあ、ドライバーに変えたんだけどよお、正直使いようなくね?』

『俺も今気付いた。もうPSPさあ、どうでもいいわ。新しいのに乗り換えようぜ』

『ああ、そう言えば最近インターネットのオンラインでやれるらしいよ』

『マジでえ? おい、さっそくそいつを捨ててパソコン一式アマ・ンで注文しようぜ』

『了解、兄ちゃん!』

『何が了解じゃボケエエエエ!!!!!!』

俺は宇宙人どもの会話を聞いて一気に意識が覚醒し、宇宙人を3分の4殺しにすると、何故か勝手に逆ギレした宇宙人に強制送還され、イライラしていたところを親父狩りをしている連中に遭遇してそれを助けたところ、その親父狩りをされていたのがこの校長だったんだよ。

「それでその助けたお礼に教員として雇ってもらったんだ。以上、銀さんの回想終わり。つか、早く解いてくれない、腕が痛いんだけど」

銀時の回想を聞いた面々は大口を開いてしばしフリーズしていたが、守形だけはメガネをこれまでにないほど光らせていた。

「ふむ、銀時。その宇宙人とやらの話を詳しく聞かせてもらえないだろうか？」

「ちょ、ちょっとスガタ！！ あんた本当に信じてるの！？ 宇宙人なんているわけじゃない！！」 ニンフはそういきり立つ。

「マスター、宇宙人って何なんですか？」

イカロスはイカロスで天然発言をかます。

「ニンフ、俺にとってはお前たちも異質な存在なのだ。お前たちがいる以上、宇宙人も存在するやもしれん」

守形はクイツとメガネを持ちあげ、静かな口調で言う。

「それで銀時、その宇宙人の名前は何と言う？」

銀時はそらに縄を解いてもらいながら、ニヤリとした笑みを浮かべると、

「ゲーマー星人だ」

第3訓 ゲーム星人再び!! (後書き)

一応、今日はここまで。

なかなか進まないものですね。これから頑張っていきますので、
よろしくお願いします。次はゲームー星人と銀時たちの対決編です。

第4訓 ゲームやるのに異世界もクソもないッ！！

銀時からゲーマー星人の情報を聞いた智樹たちは、銀時のその、アナログスティックを取り返すためにゲーマー星人を探し出すのを手伝うことにした。

銀時の記憶からするに、ゲーマー星人の今度のターゲットはオンラインゲームらしく、智樹達は今巷で評判のオンラインゲームを次々上げていき、ようやくゲーマー星人が好んでやりそうなゲームに行き着いた。

そのゲームのタイトルは………、

「モンモンハンター、略してモンハン。その名の通り、胸に欲望や野望を抱えた人間が己の野望を叶えるために、数多のモンスターをハントしていくゲームだ。モンスターの狩る量により叶えられる欲望や野望が決まると言われているが、俺はやったことはないのではありません」と確証は出来ないがな」

と、守形の説明を聞いた銀時は妙な思案顔でしばらく黙考していると、やがて意を決したように大きく頷き、

「うし！！ 案ずるより産むが如し！！ 何事もチャレエエンジが大事だ！！！！ おい！ 眼鏡！ そのモンモンハンター、俺はやるぜ！！！！」

「えええええ！！ 銀時さん、本当にやるつもりなんですか！？」

「おうよ！！ 俺は侍だ！！ 一度決めたことは死んでも貫き通す

！！ それにだ………」

銀時はスウと目を細め、その細身から凄まじい負のオーラを溢れ出させながら、

「一度ならず二度までも、俺のアナログスティックをドライバーに改造するとは、あいつらよほど命が惜しくないらしいな……。くっ、くくく、宇宙人ってさ、殺しても罪にならないよねえ？」

ドオオオオオオン！！！！！！

銀時が目を血走らせながら言い放った言葉に、この場にいる全員が銀時の怒り具合を知り、言い得ない恐怖心に大きく身震いした。

しかし、同じ男である智樹には激しく同意され、妙に意気投合した二人はいそいそとパソコンを用意するために、新大陸発見部の部屋を後にしたのであった。

さてさて、高スペックのノートパソコン一台用意した智樹は、傍らに立つイカロスへと対面し、

「おい、イカロス。カードを一枚くれないか？」

「はい、マスター」

イカロスは素直に懷から一枚のカードを取り出し、智樹へと手渡した。

「そんなのどうするのよ、トモキ」

ニンフはカードを手にした智樹へとそう尋ねると、智樹はフッフ和不敵に笑い、

「みんなで直接ゲームの世界へと行くために、このカードを使うのさー!! パソコンが一台だけじゃあ、みんなして楽しめないだろ? それに俺一度だけゲームの世界に行ってみたかったんだ!!」

子供のようにはしゃぐ智樹を尻目に、守形はモンモンハンターのサイトへとアクセスを開始していた。会員登録をし、いつでもゲームできるようにセッットすると、智樹の方へと振り向いた。

「さあ、いつでもゲーム開始できるので、智樹」

「お、おう!! では早速……」

「桜井君、ちょっと待ってくれないかしら」

と、今まで無言を貫き通していた美香子が、智樹の声を遮って話しかけてきたのだ。

いきなりの会長の言葉に智樹はカードを使うのをやめ、

「な、何なんすつか? いきなり……」

美香子は人並みを割るようにして歩み出て、輪の中央まで移動する。サアアアと一陣の風が吹いて美香子の長い髪の毛を揺らし、美香子は頬にかかった髪を手でかき分けると、

「会長が思うにはねえええ、せっかくゲームをするのにイカロスちゃんの強さがあると、面白味に欠けると思うの。だからあ、カードの能力でイカロスちゃんはエンジェロイドの能力を使えないようにするというのはどうかしら？」

会長の発言に戦々恐々としていた智樹だが、めずらしくまともな発言をした会長の言葉を聞いて、智樹は大きく目を見開いた。

「め、めずらしく普通の意見ッスね。てっきりまた何か無理難題を吹っかけられるかと……」

「あら、桜井君。君は会長のことそんな風に見ていたのかしら」

美香子はたおやかに笑いながらズンズンと智樹に近づいていく。その迫力に流石の智樹もジリジリと後ずさる。その証拠に目が全然笑っていない。

そんなやり取りを止めたのは、鼻をほじっていた銀時であった。

「はい、てめえら。いい加減にしなさい。チビを殺すのはゲーム内にしとけ。俺はサッサと金〇を取り戻してえんだからよ」

「ばっ！！！！レディの前でなんてことを口走ってくれんのよ！！！！」

と、銀時の発言に顔を真っ赤に染めたニンフが、銀時の頬を渾身の力でぶっ飛ばす。

「ふーおおおおおー！！　てっめー！！　何しやがるー！！　つか、
てめえのどこがレディ？　てめえみたいのはマウンテンゴリラって
いうんだよー！！！！」

「な、なんですってええええええええええ！！！」

ガシイイイイツ！！！！！！！！！！！！！！！！！！

銀時とニンは手を掴み合って、グルルルルルと激しく威嚇し合った。

そんな銀時とニンフを放っておいて、智樹からカードを取り上げた守形はカードを眼前に突き出し、カードを作用させた。

カードは素粒子分解され、その効力を発動させると、銀時達を目映い光で包み込む。光が納まった後には、部室内には銀時達の姿はなく、ただただ机の上に置かれたパソコンの画面が淡く光っていた。

モンモンハンター。

かのモンモン大公が身のうちに秘めた欲望や野望を、王家に伝わる秘宝でモンスターに化身させ、広大なフィールドに放ち、数多のハンター（プレイヤー）たちにこう宣言した。

『我が輩の欲望や野望の欠片を集めよ！！』
数多くの欠片を集めた者に望む物を与える！！』

欲望の固まりの勇者（野郎共）が、己の願いを叶えるべく、この

ゲームへと足を踏み入れるのであった。

モンモン村の中央

「？ お、おお！！ すげえ！！ 本当にゲームの世界に来たぜ！！」

目を覚ました智樹は周りの光景を目の当たりにして興奮した声を上げた。

その周りには守形に美香子にそはらにニンフにイカロスが集っていたが、ここには銀時の姿がなく、智樹はキョロキョロと辺りを見回した。

「おい、一番ここにいなきやいない人物がいないんだけど……」

「本当だ、銀時さんどこに行ったんだろうね？」

「どうせギントキのことだから迷子になってんじゃないの？」

若干不機嫌なニンフがパタパタと羽根を動かしながら、智樹とそはらの会話に相づちを打つ。

どうやら銀時がいないのでつまらないようだ。

「まあ、銀時なら大丈夫だろう。ああ見えてしっかりしているから。少し待ってればちゃんと来るであろう」

と、眼鏡に手を備えながら淡々と答える守形。

その守形に美香子はあらあらと呟く。

イカロスはというと智樹の傍らでぼんやりと、それでも興味深げに見たことのない光景に視線を向けていた。

守形の言うとおり一行はしばらく待っていると、向こうの方から可憐な少女が小走りで智樹達の方へと近づいてくる。

「あのおく、よかつたら一緒にパーティ組みませんか？」

モジモジと手を組んで上目遣いで誘いの言葉を告げると、案の定美少女に弱い智樹はデレエーとした表情でその誘いを受けようとすらも、智樹の態度に怒ったそはらが智樹へと猛烈にチョップを繰り返す。智樹は断末魔の叫びを上げながら、必死の抵抗も虚しくそはらにボロボロにされていた。

数分後――。頬を二倍ほど晴れ上がらせた智樹は実に残念そうに、

「ずびません……。他に待っている人がいるんで、あなたとはパーティ組めません」

「ああ、そうなんですか。じゃあ、いいですよ。その代わりにアイテム恵んで貰えませんか？」

「それならいいぜ。どんなアイテムなんだ？」

いつの間にか顔が元に戻っている智樹が少女の申し出を快く引き

受ける。

すると少女はにこやかに笑うと、

「心配しなくても大丈夫です。みんな（男）初めから持っている物何で」

一拍置くと少女は急に真顔になり、

「金。くれ」

「って、あんたかいいいいいい！！！！」

智樹は心のちやぶ台をひっくり返しながら絶叫した。

少女――否、銀時はゼエゼエと荒く息を吐き、

「うつせえよ、カス」

相変わらずの毒舌を吐き出す銀時。

そんな銀時を見て若干引き気味なニンフは、

「ねえ、アルファー。なんでギントキは女の子の姿なの？ 私たちは普通なのに」

「おそらくアナログスティックが無いために、カードが女の子と判断したようです」

淡々と状況を説明するイカロス。

それを聞いてニンフはハア〜と特大の溜息を吐くと、

「ともかくギントキ。早くゲーマー星人とやらを見つけなさいよ。そうしないといつまで経ってもその姿のままよ」

ニンフの言葉に銀時はハツとした顔つきになり、フツと笑みを浮かべると腰に下げた木刀を抜き、眼前に掲げる。

「野郎共！！ いざ出陣じゃああ！！！」

と、皆を先導して冒険に出かけようとした銀時の肩を誰かが叩いた。

銀時はその感触に気づき、振り返ってみると、頭にパンツを被った馬が立っていた。

「何か用なのか？」

守形が銀時の代わりに突然現れた第三者に質問すると、

「私たちはこのゲームの管理会社の者ですが、先程村の外れでハンターが一人何者かに襲撃されて身ぐるみ全部剥がれたようでして、誰か心当たりのある方は、「フンツ！！」ブホオオオオオ！！！！」

管理会社の者が何か言う前に銀時は腹にボディーブローを入れる。

「ええええええええええ！！！」

あまりの突拍子もない銀時の行動に智樹達は驚きの声を上げる。

それから銀時はおもむろにしゃがんだ後、管理会社の身ぐるみをはがし始める。

「お、おい！ いきなり何してんだよ！！！」

智樹がそう怒鳴ると、銀時はしれっとした表情で、

「何って、ハントしてんだよ」

「このゲームはモンスターをハントするんであって、管理会社の人からハントするゲームじゃないでしょ！！！」

ニンフと智樹が猛然と銀時に詰め寄ると、遙か彼方から濛々と土埃が上がり、よく目をこらしてみると、そこには数十人の管理会社の者が額に怒りマークを貼り付けこちらへと向かっていた。

「やばいですよ！！ 銀時さんが管理会社の人をハントしたから、管理会社が怒って私たちを排除しようとしてるわよ！！！」

「あらあら、とにかく逃げるが勝ちね」

「うむ」

「逃げるぞ、イカロス！！」

「はい、マスター」

「もおおお！！！！ なんで私がこんな目に遭わなきゃいけないのよおおおお！！！！」

それぞれの叫び声がゲーム内の空に響き渡ったのであった。

どうにか管理会社の魔の手から逃れた銀時たちは、村はずれの森の中で作戦会議を開いていた。

「これからは迂闊に村には入れん。しかし、強力な装備がない今下手にモンスターと戦うのは自殺行為。いっぺんでもゲームオーバーになったら二度とこのゲームが出来なくなるからな。だからなるべくモンスターと会っても戦うな！！遭遇したら逃げろ！俺たちは別にモンスターをハントしに来たのが目的ではない！！ゲーム―星人をハントするのが目的だからな！！」

「銀時の言うことにも一理ある。イカロスやニンフが能力を使えない今、なんの装備も持たない俺たちには圧倒的に不利だからな。にしても銀時。お前、やけに装備がそろってるな。どの武器も今の前のレベルなら使えない物ばかり」

守形の言葉にニンフは何かを確信したのか、ジト目で銀時を睨み付け、

「もしかしてハンターを襲撃したのって……」

「えへ？ ばれちゃった？」

銀時はわざとらしく拳をてんこつに当て、ペロリと舌を出して言う。

そんな銀時を見たニンフはピキイと青筋を額に浮かばせ、

「何がばれちゃった？ よー！ みんなギントキのせいなんじゃないー！」

「あれ？ おかしいな？ なんか前にこういうのがあった気も？あれ？ なんかデジャヴ？」

と、何事か呟きながら視線を遠くにやる銀時。

まだ冷めやらぬ怒りをぶつけようと大きく口を開いたニンフだったが、突如獣の咆吼のようなものが聞こえ、手前の木々が大きく揺れ動いた。

すると巨大な鎧を被った大蜥蜴が姿を現し、その姿を見たニンフやそはらや智樹は絶叫を上げる。

「きいやあああああー！！ 何あれ！？ 何あれ！？」

「と、トカゲー！！ く、食われるー！ 食われちまうッー！！」

一方、悲鳴を上げる智樹達とは裏腹に、

「ほう、こんな大きなトカゲがいるとは。これは遙か昔に滅んだとされる恐竜の一種ではないかと推測されるがー！！！！」

「あらあら、相変わらずね」

「……………大きいです、マスター」

実に冷静に感想を述べる三人組（イカロス・守形・美香子）。

そのもう一方で場の空気が読めない銀時は、

「あのうゝ、もしよかったらゝ、一緒にパーティー組みませんか？」

と、しなを作って事もあるうに敵であるモンスターを勧誘する始末。

「お、おい！！ 銀時！！！ それ、敵、敵！！」

智樹は逃げながら忠告するのと同時に、トカゲは手にした剣を銀時に向かって振り下ろす。

間一髪のところでは銀時は避けるも、自分のいた場所には大きな亀裂が縦に走っていた。

あれをもろに食らっていたらと思うと・・・、銀時は珍しく血の気が引くのを感じ、慌ててトカゲから背を向けて逃げ出した。

智樹達もそれに続くが、トカゲはその俊敏さを活用して、ドンドンその距離を縮めてくる。

「ぎ、銀時！！！ な、何かないのか！！」

「あつたらんなモンとつくに出してるわい！！ ったく！！ あの管理会社！！ 威張ってる癖にろくなアイテムなかったぞ、このヤロー！！！」

管理会社に文句を言う銀時。

銀さん、それは盗っ人猛々しいというのですよ。

トカゲと銀時たちのおいかけつこを続けていた銀時たちだが、ついにそのおいかけつこも終わりを迎えることになる。そう行き止まりにぶち当たったのだ。

銀時たちはジリジリと後ろに下がろうとするも、うしろの岸壁が邪魔でこれ以上下がれない。

まさに万事休すであった。

トカゲは追い詰めた獲物を前にペロリと舌なめずりし、頭上へと振り上げた剣を銀時たちめがけて振り下ろそうとしたその時……

「全く、お前はいつも詰めが甘いな、銀時」

と、銀時にとっては嫌というほどに聞き慣れた声が辺りに響いたのと同時に、もの凄い爆音が辺りに轟き、銀時たちは思わず耳を塞いだ。

すると、トカゲの頭がまるでトマトが破裂するかのごとく爆発し、爆炎と爆煙を辺りに撒き散らす。

しばらくして爆煙が雲散すると、銀時たちの方へと静かに歩いてくる背の高い男の姿があった。

長い黒髪にさわやかな風貌の美男子が、なにやら海賊風の衣装を

身につけ、片手にはバースーカーを持ってこちらへと歩いてきていた。

銀時はその男の姿を見つめながら呆然と呟いた。

「な、なんでツラここに……………」

「ツラじゃない。キャプテンかつーらだ」

男は無表情に銀時の言葉を訂正したのであった。

第4訓 ゲームやるのに異世界もクソもないッ！！（後書き）

はい、今回はここまでです。なんかグダグダですね。

次は神楽や新八が出て来て、神楽にニンフがヤキモチを焼く話になるかな？。

まあ、期待せずに待っていてください。

第5訓 親バカと馬鹿は紙一重!!!

「んで、何でテメエがここにいるんだよ？　ここは俺らの世界じゃねえんだぞ？」

銀時が腕を組んで桂にそう尋ねると、珍しく桂は額から汗を流し、

「うむ……。実はなエリザベスがここ数日前から行方不明なのだ」

「エリザベスが？　おいおい、お前が嫌になって逃げ出したんじゃないの？」

「何を言う!!!!　俺とエリザベス是一心同体!!!!　つかず離れずの間柄だぞ!!!!?!!?　あのエリザベスが、俺から逃げ出すなど天と地がひっくり返るにあり得ない!!!!!!」

銀時の物言いに桂は青筋を浮かばせながら激昂した。

「うわっ！　唾を飛ばすなよ、ツラ。怒るより先にテメエがどうやってここに来られた理由を説明しろ」

「フン、確かにお前の言うとおりだな。俺もエリザベスのことで気が立っていたらしい。……。よし、ここ数日に起きた出来事を話すしよう」

桂を中心に銀時たちは円形に座り、桂の説明に耳を澄ました。

「あれは貴様が消えて数日たった日のことだった。俺とエリザベスは地球を根城に、麻薬や兵器を密輸入している天人のアジトを調査している最中に事件は起きた……………」

某、歌舞伎町のビル街に桂とエリザベスが二人並んで、ビルの物陰から天人たちの密輸入の場面を盗み聞きしていた。

『エリザベス、ところで例の物は買ってきたんだろうな?』

桂は傍らに立つアヒルが巨大化したような宇宙生物——通称エリザベスに話しかけると、エリザベスはコクリと頷いていて、口の中に手をつ込んで白いビニール袋を取り出した。

桂はそれを受け取ると、淡々とした表情で袋の中身を漁っている……………、何やらプルプルと小刻みに震えだした。

『エリザベス……………、コレはなんだ?』

桂の問いにエリザベスはサツと看板を取りだし、

【桂さんが頼んだジャムパンと苺牛乳です】

桂はそれを見た途端に目を光らせて、

『俺が頼んだのはあんパンと牛乳だ!!! このようなハイカラな物を頼んだ覚えはないぞ?!?!? エリザベス、お前は張り込みの基本というものが全く理解できてないではないか!!!!』

ジャムパンの袋を力任せに破り、袋の中身を散乱させる。ビニールの袋が裂ける音に密輸入真つ最中の天人たちが桂たちの正体に気づき、手に持った銃を次々と発砲してくる。

桂とエリザベスは飛んでくる弾を避けながら、延々と罵りあいが続けていたのであった――。

「……………というわけ「何がいてえんだ！！」 テメエはよおッ！！！」ふあだだだだだだ！！！！」

銀時は説明し終えた桂の鼻の穴に指を突っ込み、グオオオオと力任せに持ち上げ、勢いよく放り投げた。ズシャアアアと豪快に土埃をあげながらスライディングする桂。

桂の説明が理解できずポカンと口を開いていた智樹たちの面々だったが、銀時の無茶ぶりにますます大口を開けてぼんやりと傍観する智樹たちであった。

「何をする！！！！ 銀時！！！！ 危うく鼻の穴が破れてしまうとこるだったではないか！！！！」

「ああゝ？ 鼻血垂れ流しながらしてる奴に言われたくないわ。もう、とつくに破れてんだよ。人間は身体のおちこちが破れてるもんなんだよ。つか、お前のさっきの話し、あれ何？ お前あんパンの話しかしてねえじゃねえか。肝心の話をしるよ、全くテメエはむっかしから要領が悪いといつかなんといつか……………」

銀時はボリボリと頭を掻きむしる。

桂はどこから取り出したティッシュの箱を小脇に挟み、小さく丸めたティッシュを両鼻を鼻の穴に詰めるという間抜けな恰好で話を続けた。

「ふむ、それから一夜明け、いつものように攘夷志士の屯所に会談をしていたのだが……。いつも無遅刻無欠席のエリザベスが来ないのでな……。俺も一日くらいなら多めに見ていたのだが、ここ数日ほどエリザベスの顔を見てはいない。もしかと思い、近辺を探ってみたところ……。」

桂は再び懷から一枚の写真を取り出し、銀時にそれを手渡す。智樹たちも銀時の横から写真を見ようと顔を伸ばすと、そこには……。

智樹たちには見たことのない、一方銀時には馴染みのある生物が、黄色に光るUFOにさらわれる光景が写真に載っていた。

手には何やらビニールの袋を持っているのが、遠目ながらではあるが確認できた。

「どうやらエリザベスは深夜遅くに、あんパンと牛乳を買いに行っていたらしい。俺があんなに怒らなければ、エリザベスが宇宙人に誘拐されることはなかったのに！！ たかがあんパンことで何を向きになっていたんだ俺は！！！！」

桂はダンッ！ と地面に拳を思い切り叩きつけて嘆き伏せた。

というか、あんパンごときで喧嘩するのもどうよ……？

「この円盤からするにエリザベスをキャトルミーティングしたのは、

間違いなくゲーマー星人だな」

銀時は見覚えのある黄色に光る円盤を、憎々しげに見やりながら
そう吐き捨てた。

「ああ、お前もそう思うか。……ところで、銀時。何故お前はまたその様なおなごの恰好をしているのだ？ もしや、お前とうとう男としての、侍としての矜持を忘れ、ついに女に目覚めたのか？」

桂の率直すぎる言葉に銀時はギンツと目を光らせ、

「んな訳ねえだろーがあ！！！！俺はなあ、またあいつらに超レアもののアナログスティックをドライバーに改造されてたんだよ！！
！ 今度はボックスドライバーじゃなくて、マイナスドライバーだよ、このヤロー！！！！ どう怒ればいいか分かんないねーんだよ！！！！」

「そういきり立つな、銀時。ここは同じ目的を持つ者同士。共同戦線といこうではないか」

「ああん？ 共同戦線だと？」

「そうだ。探す者は違っても、真の目的はただ一つ。ゲーマー星人を探し出し、血祭りにあげること。

見知らぬ世界で単独で行動するより、見知った仲間と共に行動した方が心強いというものだ。これは戦場でも同じ事よ、銀時」

銀時は桂の言葉にウグツとうなり声を上げる。

確かにそれもそうだ……。こいつは変人だが、腕は相当にたつ。ともすれば仲間に加えた方がいいのではないか？

「おい、銀時。どうすんだ？ この人を仲間に入れるのか？」

智樹は顎に手の甲を当てて黙考する銀時にそう尋ねると、銀時はうむと頷いて見せた。

「うし、分かった。おい、ツラ。テメエの誘い乗ったぜ」

「うむ、それでこそ銀時だ」

銀時と桂はガシツと手を強く握りしめ、ニヒルに笑い合うのであった。

「あつ、そうそう。銀時」

「？ 何だよ、ツラ」

桂を連れて歩きながら鼻をほじっていた銀時は、桂の問いにめんどくさそうに応える。

「言つのを忘れていたが、ここにはリーダーと新八君も来ているのでな。一つよろしく頼むぞ」

「うええええええ！！！！ あいつらが何でだ！？！？！？！？」

「？ ギントキ？ 何をそんなに驚いているの？」

と、銀時の傍らに立つニンフがキョトンした表情で尋ね返した。

「これが驚かずにいられるかっての！！ ま、マジでか。神楽に新八が……………。あいつらには心配させっちまってるだろうな……………」

「そんなことはないぞ。むしろお前より給料の事を心配していたぞ」

「……………いや、まあ、そうだとは思っていたけど、お前に言われると尚更凹むわ」

銀時はガツクシと頂垂れながら呟いた。

「まあ、そんなにへこたれるな。そんなお前にいい物を持ってきたのだからな」

「……………いい物って何だよ？」

桂は自信満々に懷から取り出したのは、

「ほら、これを聞け。俺が作曲作詞した『攘夷がJOY！』だ。これを聞けば、お前も攘夷志士としての誇りを「フン！！」って、何をするか貴様ああああ！！！！」

銀時は桂が取り出したCDのケースを思い切り肘を持ち上げて壊し、その破片が額に刺さり血を吹き出しながら桂は絶叫した。

「テメエの歌なんて聴いたら余計凹むわ、凹みまくるわ！！ つか、お前前回歌ってなかったか！？ なんだよ、一丁前にCDなんか作りやがって！！！！」

「何を言う！！！ これも立派な攘夷活動だ。音楽によって攘夷活動に対する偏見を少しでも無くそうとだな。それにこれはこの前のとは別バージョンだぞ。あーあ、聞く前に壊して。どうーすんだよ、コレエー。もうっ、お母さんはあんたをそんな風に育てた覚えはありませんよ！！！」

「テメエーに育てられた覚えはねえーよ！！！！！！！！！」

ガシイイイイ！！！！ と手を取り合って睨み合う銀時と桂。

それを遠巻きに見つめる智樹たち。

「なんか、あの人って変わってるな……………。流石銀時の知り合いだけあるわ」

「……………?」

「うむ、実に興味深い」

「うふふふ。そうね」

「っていつか、智ちゃんだけには言われたくないと思うよ」

「私もそはらと同感」

と、それぞれ感想を述べる。

その間もなおも喧嘩続ける銀時と桂。

しかし、そんな喧嘩もある人物の登場によって終わりを迎える。

あれ？ デジャヴ？ と思った方もいるかもしれないが、そこは大目に見ようね

銀時と桂の間に小さな人影が猛スピードで墜落し盛大な土埃をあげた。

その威力ときたら遠く離れた智樹たちにまで及び、智樹たちはその身体を衝撃波で飛ばし、あちこちに転がった。

「ゲホッ、ゴホッ！！ な、なんだッ！？！？」

「何が起きたの！！」

「敵対反応なし。マスター、どうやら敵ではないようです」

イカロスがキュイイと目を赤く染め、今し方落ちてきた何かを探したが、敵ではないと知ると通常モードに戻った。

煙が晴れると、そこにいたのは眼鏡をかけた少年の襟首を掴んだ、チャイナ服を着た少女が銀時たちと桂の上に立っていた。

「ようやく見つけたアル。全く、手間取らせるなよ、この銀髪天パ
ーが」

第5訓 親バカと馬鹿は紙一重!!! (後書き)

はい、今日はここまでです。なんか桂回になっちゃった……
・。次こそはニンフをやキモキさせます!!! 絶対、絶対!!!
ここに宣言します!!!

エリザベエエエス by 桂

第6訓 真打ち登場！！　　って、チャイナゲロ吐き娘と駄眼鏡じゃねえかあ

銀時と桂を踏みつぶしたチャイナ服の少女は、手に持った眼鏡をかけた少年をポイツと地面へと放り捨て、どこから取りだしたのか、酢昆布をクチャクチャと咀嚼しながらトンツと銀時たちの上から下りる。

その衝撃に気を失っていた銀時と桂は気がついたようでもクリと起き上がった。

「？　銀ちゃんにツラ、起きたアルか？　確かにトドメをさしたはずなのに。案外しぶといアルな、銀ちゃん。昨日つぶし損ねたゴキブリ並ヨ」

「ああ〜ん？　テメエ、いきなり上から飛び降りてきておいて何ぬかしてんだ、このヤロー！！　つか、一週間ぶりにあったのにもっとマシな台詞はないんかい！！！」

銀時はガシツと神楽の頬を掴み、血走った目でそう言い放つも、当の神楽はどこ吹く風といった様子で、クチャクチャと酢昆布を噛みながら、

「うつさいね、この天パー。お前がいなかったせいで、ワタシがどれだけひもじい思いをしたと思っっているアル。あれから三食酢昆布ネ。おかげで緑色のウン。が出るようになったヨ」

「うおい、仮にも女の子がそんな汚い言葉を言っちゃあいけません！！　お父さんはそんなに育て覚えはありません！！！」

「デメエに育て覚えはないアル。勝手にほざくなヨ、この天然パーマネント」

銀時と神楽の間にバチバチと何やら電流がスパークしており、どこからどう見ても修羅場であつた。

そんな二人を遠目から見つめる智樹たちであつたが、その中の一人――ニンフだけはどこかそんな二人のやり取りを見てブウと不機嫌そうに頬を膨らませた。

その証拠に虹色に輝く羽根がバタバタと忙しく羽ばたいていた。

「? どうしたの、ニンフ」

「何でもないわよ、アルファー。ただ、何か動力炉が少し痛むだけよ.」

ニンフはイカロスの問いにぶっきらぼうに答え、ソツと自分の平らな胸に手を置いた。

（何だろう。あのダウンーとギントキの姿を見ると、動力炉の部分がチクチクと痛い。何で？ 何で？ シナプスにいたころはこんな気持ちになんかならなかったのに.）

ニンフは苦しそうに顔を歪めると、ちらりと銀時と神楽の姿を盗み見る。

ニンフが見つめている間も二人は激しく罵りあいをしている。

そんな光景を見ると、ますます動力炉が激しく痛むのであつた。

「……ッ！！　いつまで喧嘩してんのよ！！　この馬鹿
ダウナー！！！！」

ニンフは唇を噛み締めると、キツと慄然と面を上げると、銀時たちへと駆け寄っていくのであった。

神楽はニンフが駆け寄ってきたのに驚き、

「なんアルか、この女は！！　ま、まさか銀ちゃん！！　こんな幼気な女の子にまで手を出して、挙げ句にこんな首輪に羽根まで付けて！！　幻滅アル！！　お母さんはこんな子に育てた覚えはないヨ！！」

神楽はニンフの出で立ちを見て、頬を怒りと恥ずかしさに真っ赤に染め、ポカーンとしている銀時の頬を怒りが冷めぬままに思い切り叩き倒す。

流石の銀時も宇宙最強の戦闘民族の夜兎である神楽に、思い切り叩かれたとあってはひとまりもない。銀時はビュンッ！！　ともの凄いスピードで後方へと吹っ飛ぶが、それを見逃す神楽ではない。

夜兎の瞬発力をフルに活用し、銀時にすぐさま追いつくと、その身体に的確に攻撃を加えていく。

ドカ！　バキ！　グシャ！！　バキィ！　ドドドッ！　ゴガッ
！！！！

その絶妙な攻撃のコンビネーションに、戦略エンジェロイドであるイカロスもニンフも軽く神楽に恐れを抱く。

一方銀時はというと、神楽に散々と殴られすでに虫の息だ。

それを見かねた桂は倒れ伏せていた新八を起こしながら、暴走気味の神楽に注意し始める。

「リーダー、その辺で止めておけ。見ろ、銀時はすでに虫の息だ」

「ああゝ！ 本当ネ！！ 殴るのに夢中になりすぎて気づかなかったヨ」

神楽は桂の注意によって、初めて銀時が虫の息なのを知り、実に呑気そうにアハハハと笑い声を上げながら頭を掻くのであった。

それから数時間後――。

顔の形が変形し虫の息だった銀時はどうにかこうにか死の淵から生還し、数時間ばかりで戻った自分の顔を撫でさすりながら、目の前に巨大なたんこぶを付けて正座する神楽と、割れた眼鏡をかけて申し訳なそうに縮こまって正座する新八の姿を見据えた。

「―――んで？ ヅラならずお前たちまでもここにいるのどういうワケなんだ？ 知っての通りここは異世界で流行ってるゲーム内だ。ここに飛ばされた俺ならまだしも、向こうの世界にいるお前らがどうやってここにこれたんだ？」

「あれ？ 銀さん、桂さんから聞いてないんですが？」

新八の問いに銀時は大きく頷く。

「ああ、意味ないことを延々と喋って、肝心なことは何一つ」

「何を言う！？ 俺のエリザベスがなくなった事をお前に教えた
だろうが！！！」

桂はカツと目を見開けて銀時を怒鳴りつける。

「ああ〜ん？ テメエのは後半あんパンの話しかしてなかったじゃ
ねえか！？」

再び取っ組み合い喧嘩をおっぱじめようとする二人に、慌てて新
八は身を挺して止めに入る。

その傍ら暇になった神楽は自分の姿をジューツと見つめている智
樹たちに気づき、新たに取ridした酢昆布をハムハムと噛みながら、
智樹たちの方へと視線を向ける。

「何アルか？ ワタシの顔に何かついてるアルか？」

「い、いや……………。なんかお前の肌の色とかが珍しくて……
……………つい目がいつちまったというか」

そう。智樹たちが目がいくのも分かる。

神楽の透き通るほどに白い肌は、この地球上どこにもいない。そ
れにエンジェロイドであるニンフとイカロスも、彼女の肌の白さに
は適わない。

それにもう一つ気になる箇所があった。

それは彼女の横に置いてある紫色の番傘であった。雨も降っていないのに肌身離さず持っていることに不自然を抱いた。

「ああ、それは無理ないネ。ワタシは人間じゃないからな」

智樹たちは神楽の言葉に目が点になった。

勿論、大きく食いついてきたのは眼鏡をかけた新大陸を求む変態、守形英四郎その人であった。

彼は眼鏡をキラーンと光らせ、相変わらず酢昆布を嚙っている神楽へと詰め寄る。

「人間じゃないとはどういう意味だ？」

「言葉道理ヨ。ワタシは宇宙人アル。テメエらとは格が違うんだよ、って、銀ちゃんが言えって言いました」

神楽はしけた顔で鼻をほじりながら、自分に詰め寄った守形に向かって言い放つ。

そんな神楽の言葉を聞いて、智樹たちはホッと胸をなで下ろす。

何だ冗談か、と思った束の間……。

「まあ、宇宙人の所は否定しないアルけどな」

神楽は酢昆布を食べ終わったのか、指をペロツと舐めた後、ゆっくりと立ち上がる。

それから閉じていた番傘を開き、クルクルと回しながら差した。

「さつてと、ところでお前たちは誰アルか？ その4人は人間って分かるアルが、その二人はどう見ても人間じゃないアル。この歌舞伎町女王神楽の目は誤魔化せないヨ」

智樹たちは神楽の審美眼に思わず胸をドキリと脈打たせた。

確かに、ニンフとイカロスは人間じゃなくエンジェロイドだ。

だが、何故神楽にばれた？ 何故だ？ 何故何だああああ！！！！

「いや、お前ら普通気づくだろ、羽生えてんだぞ、羽」

神楽は智樹たちの胸中の叫びを聞いていないのにも関わらず、冷静にツツコミを入れる。

「な、何でばれたんだ！！！！ って、おい！！ ニンフ！！ テメエが元凶か！！！！」

智樹はニンフの背中に生えている立派な羽を指さし、ギャーギャーと怒鳴りつける。

「な、なによ！！！！ あたしは悪くないわ！！！！ エンジェロイドのこの私が何で羽を隠さなきゃいけないのよ！！！！」

銀時たちの様子を見ていたニンフは突然の怒鳴り声に不機嫌を表

し、智樹に向かって怒鳴りつけた。

「ばっ！！　そういうのはだな、時と場合を考えてだな！！！」

そんなニンフの態度に智樹もビキイと筋を立てて応戦する。

「そんなの知らないもん！！　っていうか別にばれたって何の問題もないじゃない！！！」

「そうアル。別に羽が生えたって気にしないヨ。歌舞伎町にはもつと凄いのがいたネ」

神楽はニンフの言葉に賛同した後、手にした番傘を畳み、未だ派手な言い争いを繰り返している銀時たちに向かって、

「……………って！！　うるせえんだよ！！！！　このクソボケ共が！！！！」

思い切り番傘を投げつけた。神楽の投げた番傘は弾丸のように真っ直ぐに飛んでいき、見事銀時の頭に命中した。

頭に番傘を食らった銀時は白目を剥いて地面に倒れ伏せる。

そのデンジャラスな光景に辺りはシィィンと静まりかえり、一拍置いた後に、

「ちょ、ちょつとおおおお！！！！　神楽ちゃん！！！！　何やってんの！？！？！？　下手したら銀さんが死んじゃって、この作品が終わってしまいますよおおお！！！！！」

新八の叫びがゲーム内の空に響き渡る。

それを合図に阿鼻叫喚の連鎖が始まった。そはらと智樹はギャーギャーと喚き散らして逃げまどい、その後を追うイカロス。ニンプはと言うとピクピクと痙攣している銀時の頭を突っついていた。

美香子と守形は冷静にその光景を眺め、桂と新八はこの事態を引き起こした神楽を怒鳴りつけていた。

「リ、リーダー。流石にやり過ぎじゃないか？ あやつのアホな頭が一層パーになったんじゃないか？」

「ちょ、桂さん！！ 心配することそこなんですか！？！？ もうすこし別なところに気をかけましょうよ！！！」

「新八君。こいつの生命力はゴキブリ並だ。頭に傘が当たったからって死にはしないであろう」

「いや、ま、そうなんですけどね。多少は心配してあげないと、銀さんがあまりにも可哀想で」

「五月蠅いネ、新八。だいじょーぶよ、銀ちゃんが死んだら、次は私がこの小説の主人公になるアル。

タイトルは【夜兎なおとしもの】で決まりネ！！ 直木しょー間違いなしヨ！！！」

「そんなわけあるか！！！ 何勝手にタイトル変えてんだよ！！！」

「こんな奴よりワタシの方が十分に主役にむいてるヨ。ズバーン、バーンと敵を一掃するアクション小説アル！！！」

神楽は瞳をキラキラと輝かせながら、ブンブンと番傘を振り回し、格好良く言い放つ。

「明らかに神楽ちゃんが主役じゃ、この小説崩壊するから！！！！
ほら、このもう一つの主役である智樹さんが怯えてるじゃない！！
！」

と、新八が指さした先には子兔のように震えている智樹の姿があった。

それを見た神楽はフンツと鼻で笑い、

「エロ本が好きなエロガキは家に帰って、マンマの乳でもしゃぶってな」

思いつきり見下し目線でそう吐き捨てた。

「おいおい！！！！これ以上関係悪くしてどうすんだよ！！
！！まだあと6話分一緒に活躍していくんだから、仲良くするよ
う心がけてよ！！！！」

「うるせえーな、仲良くしてるだろーが。気持ちわるいんだよー」

と、ツツコミしてくれた新八を思い切り侮蔑の色を浮かべた目で睨み付ける。

「あんだと、このアマー！！！！　テメエー、やっぱ一星に帰れえ！！！！」

流石の新八も神楽の毒舌ぷりにブチ切れ、互いにメンチを切りながら睨み合う。

そんな濃すぎるキャラに手も足も出ず、智樹たちはおろおろと戸惑っている、

不意にユラリと頭から血を流した銀時が、ものつすごい負のオーラを放ちながら立ち上がった。

まるで草木をも枯らす程の強烈な負のオーラで、派手な喧嘩を展開していた神楽たちもその放たれるオーラに怯えて後ずさる。

まるで幽鬼のように立ち上がった銀時は屹然と顔を上げて、ギョッピーンと目を光らせて、

「デメエらあああああ！！！！いい加減にしやがれえ！！！！！！！！」

獣の咆吼のような銀時の怒りの叫びに、智樹たちは勿論のこと戦略エンジェロイドであるイカロスたちも肌にブツブツと鳥肌を立てた。

それから手ひどく銀時に叱られた智樹たちは、二度と銀時を怒らすまいと心に誓うのであった。

第6訓 真打ち登場！！ って、チャイナゲロ吐き娘と駄眼鏡じゃねえかあ

今日はここまで。次はもう少し詳しい設定を交えていくつもりなので、よろしくお願いします。では、また次の機会に（^^）／

第7訓　ボクが異世界に飛ばされたわけ？　ンなモン、誰得よ？

ああ、作得か

銀時の怒りに触れた智樹たちはビクビクと怯えていたが、そんなのは慣れっこである神楽たちは平気な顔で銀時に接していた。

そんな神楽たちを智樹たちは図太い性格であると心の底で思った。

「ところで銀ちゃん。さつきから思ってたけどその恰好はなんアルか？　前のゲーマー星人の時と同じ恰好ネ」

「ああ、本当だ。まさか銀さん、またゲーマー星人に股間のアナログスティック取られて、女の子の恰好にしちゃったとか？」

新八の放った言葉に銀時はピクリと肩を揺らせ、ギギギと油の切れたカラクリのような、ぎこちない動きで新八の方へと振り向いた。

「ぬあんのことかな、ぱつつあん。俺はしょうしんしょーめい男だぜ。ほら、その証拠に……」

銀時はモゾモゾと股間の方へと手を持って行くが、途中でその手の動きは止まってしまふ。

そんな銀時に新八は疑問に思い、目を細めながら、

「その証拠に……？」

「ハハハハ……、神も仏もねえよ。てめえにはわかんねえよなあ！！　股間のアナログスティック健在中なんだからよあ。しかも、今度はマイナストライバーだよ！！　はたまたボックスよりタチが

悪いわ！！ 中途半端すぎてどう怒ればいいのかかんねんだよ！！」

「……ハア。やっぱりドライバーに改造されてたんですね。っていうか、荒みすぎでしょう。そんなにアナログスティックがないことがショックなんですか？」

「そうアル。どうせ銀ちゃんのアナログスティックなんて使い道ないアル。腐って落ちた方が世の中の為ネ」

「銀時、金。がなくとも攘夷活動は……、ああ！！」

ポーカーフェイスでそう呟いた桂は何か思いついたような表情を浮かべ、ポンツと手のひらで拳を叩き、フツと柔らかな微笑を浮かべて銀時の肩を叩いた。

「銀時、攘夷志士になれ。今なら一ヶ月の間なら無料で金。が装着できるサービスが付けられるぞ……、勿論攘夷だけに「んなモンあるわけないだろうがああああ！！！！」ウガアアアアアアア！！！！」

額に怒りマークを付けた銀時が適当な事を宣う桂を再び殴り飛ばした。桂は奇声を発しながらゴム鞠のように地面を跳ねながら吹っ飛んだ。

銀時はハアハアと荒い息を吐きながら、いつもは死んだ魚のような瞳をぎんぎらと輝かせており、拳からは桂の血を滴らせていた。

その有様はまるでゴリラに育てられた暴君であった。

そんな銀時を見てますます智樹たち（勿論、守形と美香子、イカロス別であるが）は震え上がる。

しかし、その一行の中でも唯一（新八や神楽を除けて）銀時に意見する人物がいた。

その人物とはニンフである。

彼女はビクビクと怖じけつきながらも、怒り狂っている銀時へと近寄り、

「……ギントキ。少しは落ち着いたらどうなの？　こんなんじゃあいつまで経っても話が進まないじゃない」

「ああ、そうだな。俺も怒りすぎたようだ……」

銀時もニンフの言葉で少しだけ我を取り戻したのか、落ち着いた声で己の所行を詫びた。

さて、銀時に吹っ飛ばされた桂も無事復活し、深い森の中を歩いていく銀時たち。

ザシザシと下生えを踏みしめる音が辺りに淡々と響く中、銀時は新八へと先程の話の続きを持ち出した。

「おい、新八。さっきの話の続きなんだが……、てめえらはどうやってこの世界に、このゲーム内に来られたんだ？」

そう、前にも言ったと思うがここは銀魂ワールドとは別の異次元であり、ある特殊な方法でないと来られない。その特殊な方法とは思いついたくもないが、あの源外の作ったカラクリを用いなくてはならない。

あんの偏屈じじいがおいそれと簡単に使用させてくれるとは思わないし……、銀時の時だって試験運転中だとか言って無理矢理乗せられたし。

ともかく!!

この世界へはあのカラクリを用いない限り来られないはず。

なのに何故こいつらはここにいるのだろうか？

流石にこのモンモンハンターとやらが、俺の世界で遊べるとは到底思えない。

なのにこいつらが現実世界の時と同じ恰好のままで、このゲーム内にいるということはどういうことなのだろうか？

疑問ばかりが脳内を占め、普段頭を使わない銀時はすでに頭が消化不良を起こしていた。

「ああ、そう言えばまだ言ってますでしたね。実は……」

回想

銀時がそらおと世界に転送されてから一週間後

――。

銀時の行方を捜していた神楽と新八たちは一週間前に、銀時が最後に取った行動を推理すると……、ある場所が脳裏に浮かんだ。

その場所は……。

「おお！ 銀の字んところの神楽と新八じゃねえか。二人揃ってどうしたんだ、一体」

そう、平賀源外が切り盛りしているカラクリ工房『からくり源外』である。

店の主である平賀源外は手に電動ドリルを持ったまま、突然訪れた来客を出迎えた。

「どうしたんじゃないですよ、源外さん。あれから一週間ほど銀さんの姿が見えないんですよ」

新八が腰に手を当ててそう言うと、源外はドライバーを机の上に置いてケラケラと笑った。

「何がおかしいアル、このクソじじい」

鼻糞をほじりながらそう尋ねる神楽に、源外はケラケラと笑いながら、

「いやあな、別に心配しなくともだいじょーぶよお」

「？ それは一体どういう……？」

新八が眼鏡を光らせながら源外に尋ね返すと、

「んあ？ ああ、銀の字ならな……。異世界へ行つたぜ」

……………はあ？

「あの、今何と……？」

「聞こえなかったか？ 異世界に行つたんだよ、異世界へ。この俺が作ったカラクリでな」

おおつと、火花が……、と顔面に飛んでくる火花を避けながらそう呟く源外に、新八はありつた力の力を込めて頭に拳を振り下ろした。

ガツ——ン！！！！ という堅めの効果音が工房内に響き渡る。

「グウオオオオオ！！！！ おい、テメエ！！ 何しやがる！！」

「何しやがるじゃあねえだが、このクソジジイ！！！！ テメエ、銀さんに何しやがった？ ええ？ 何しやがったって聞いてんだよ！！」

新八が源外の襟首を掴みながらそう凄むと、源外は襟首を捕まれた息苦しそうに藻掻く。新八は源外が窒息する前に襟首から手を離

し、床へと放り投げた。

それを見逃さずに新八の後ろに控えていた神楽が、喉奥に指を突っ込みゲロを吐くマントポーズを取りながら、一步また一步と床の上で尻餅をつく源外へと歩み寄る。

「テ、テメエラいつてい何を……」

「さあ、源外さん。銀さんに何をしたか言わないと、神楽ちゃんのゲロシャワーが頭上に降り注ぐことになりますよ。いいんですか？ 数日は臭いとれませんか？」

ゴゴゴゴと負のオーラを身に纏いながら、淡々と源外を脅す新八。その後ろでは神楽がオエ、オエエと爆弾投下の一步手前状態であった。

流石に愛しの工房をゲロまみれにされるのはいやだったので、源外は新八たちに一週間前の出来事を洗いざらい話し始めた。

源外の話聞き終えた新八は自己嫌悪に陥り、頭を抱えてその場に蹲った。

自分たちが「暑いから」という理由で銀時を一人で行かせたからこんな目に、と新八は嫌悪するも、神楽はフウーンと割とどうでも良さそうに源外の話聞いていた。

そんな神楽に新八はジト目で見つめると、

「神楽ちゃん、銀さんが心配じゃないの！ー！」

「？ 何故アルか？」

「何故って……。銀さん、見知らぬ世界へ飛ばされたんだよ、たった一人で。心配するのが当たり前じゃないか！！」

「銀ちゃんなら大丈夫ネ。割と適応性があるし生命力もそこら辺のゴキブリより凄いアルから、きっと異世界でも生きていけるヨ」

神楽は平然とした口調とは裏腹に、ギュウツと手にした番傘を強く握りしめた。

それは彼女なりの“意地”であつたのだ。

本心を悟られないための、彼女なりの強がりだったのだ。

そんな神楽の心情を理解した新八は己の弱さを恥じた。

自分より年下の神楽が弱音も吐かずに耐えているというのに、年上の自分がクヨクヨしてたんじゃあ示しがつかない。

そうだ、今必要なのは“悩む”より“行動”すること。

「……そうだね。ゴメンね、神楽ちゃん。僕らがしっかりしないで、どうやってあのダメ店主を救うと言っただ！！」

新八はずり落ちた眼鏡を掛け直し、源外の方へと詰め寄った。

その剣幕に老齡の源外は思わずたじろぐ。

「な、なんでえ？ どうしたってんだ？」

「源外さん！！ 僕たちを銀さんのいる世界へと送って下さい！！
お願いします！！」

「ワタシから頼むネ！！ このクソジジイ、とつと転送させるヨ」

「あれ？ それ頼んでくない？ どっちかというと命令してねえ？」

新八が必死に頼み込む後ろで、耳を穿る神楽が偉そうに命令すると、源外は間髪入れず頼み込みの主旨を間違えている神楽にそうツッコミを入れる。

「そんなことより！！ 僕たちを転送できるんですか？ できないんですか？ どっちなんですか！？」

「あれ？！ 俺の突っ込み総スルー！？」

「うつせーなあ。早く結論だけ言えヨ、このハゲジジイ。その鬚引っこ抜くぞ」

引っこ抜く宣言以前に既に鬚をグワシと掴んでいる神楽。

脅しだ、これは明らかに脅しだ……。

「あー、あー、あれはだな。そのー、だな」

「はっきり言わんかい！！！！ このクソジジイ！！」

言葉を濁す源外に痺れを切らしたのかメンチを切る新八。

そんな新八に急かされて源外はようやく重たい口を開いた。

「……転送は無理だ！！！！！」

ドオオオオオオオオッ!!!!!!!!!!!!!!

派手な効果音と共にそう宣言する源外に、とうとう新八はキレた。

「ふっざけんなあああああ！！！！」

「せやああああ！！！！！！」

「テメエ、俺のこの数分を返

「そうアル！！！！！！ふざけんなヨ、このカラクリジジイ！！！！」

グワァ
シイイイイイ！！！！！！！！！！

神樂の咆吼と共に源外の鬣が引つ張り上げられる。

「グオオオオオオオオ！！！！ 止める！！！！ この鬻抜かれる
と、俺はタダのゴーグル掛けたタコジジイになっちまう！！！！」

と、痛みに耐えながら神樂の手を鬚から外そうと抵抗する源外だが、宇宙最強の傭兵部族である夜兎族の神樂には敵うはずもなく、もう少しで源外の鬚が干切れそうになったその時に……。

「すまぬが、ここに平賀源外というカラクリ技師はいると聞いたのだが……」

ガラガラガラ、と引き戸を開ける音と同時に工房に入ってきた男によって、“老人虐待”という名の暴虐は終わりを迎えたのであった。

その男の名は――、ツラであった。

「ツラじゃない。桂だ」

↓ 第8訓に続く。

第7訓　ボクが異世界に飛ばされたわけ？　ンなモン、誰得よ？　ああ、作得か

今日はここまでです。ニンフは出てこないです。9話からは出しますが（萌え）。次回は桂回になりそうです。↑またかよ！！！
と思いの方もいるでしょうが、そこは勘弁してやってくださいませー、旦那。あとで土方殺つときますんで。

番外編 寂しがりやなニンフさん

これはハーピー襲撃編から少し経った番外編です。そこはご了承してみてくださいませ。

あとニンフ視点からお送りしていきますと思います。それではどうぞ楽しんでみてください。

私は羽がなくなった背中を鏡越しにボンヤリと見つめていた。千切れた後がうつすらと残っていたが、それもよく見ないと分からないいほどになっていた。

これで私もダウンナーと一緒に……。

しかし、私は別に後悔などしていなかった。羽を失ったことは勿論悲しいが、その代わりに私はすばらしいものを二つ手に入れた。

一つは自由だ。エンジェロイドである私にはいまいち自由というものがないけど、けどこの晴れ晴れとした気持ちかトモキたちの言う自由ならば、私は素直に喜べるだろう。

あの“元”マスターから解放された清々しさは、生まれたときから一度も感じたことのないものであったが、それでも私がとてもその感情が心地いいことに気づいた。

私はそこまで考えて初めて笑みを浮かべた。それは上辺だけの笑みでなく、心からの笑顔であった。

私はそこまで考え、洗面所を後にした。

えっ？ あと一つは何だって？

何よ、急かさないでよ。ちゃんと教えてあげるから、大人しくそこで待ってなさいよね。

私はウキウキとした足取りで、あの人がいる居間へと向かう。きつといつもの死んだ魚のような目でアイスを食べながらテレビを見ている、そう……、

私は襖の淵に手を掛けゆつくりと引きながらその人物の名を呼んだ。

「ねえ、ギントキ……、ちよつといい？ って、あれ？」

私はこれまでにない極上の笑みを浮かべてその人の名前を呼んだが……、テレビの前にはあの人はいなかった。

私はつまらなそうに唇を尖らせると、あの人が座っている場所へと歩み寄り、その場所にポスンと腰を下ろした。

えっ？ 何よ？ いい加減教えろって？ はあ……、いいわよ。

暇つぶしに教えてあげるわよ。

二つめはね……、ギントキが私のマスターになってくれた事よ。

羽もなくなつて、マスターもいなくなつちやって落ち込んでいた私に、ギントキはそつと手を差しのばしてくれて……、い

つもちゃらんぽらんな表情で、

『俺がテメエのマスターにでも何でもなってる。だから、そんなに落ち込むな』

って、言ってくれて……。

えっ？ 何か凄く嬉しそうだなって？

そ、そんなわけないじゃない！！ た、ただマスターもいないんじゃないから、仕方なくギントキのマスターになっただけ！！！ それだけなんだからね！！！！

「？ さっきから何ブツブツと独り言言っているの？ ニンフ……」

と、私が黙考している間に、どうやら買い物からアルファアが帰ってきたようだ。買い物袋を手にしたアルファアがブツブツと呟いていた私を、不思議そうな顔で見つめている。

声を掛けられた私は我に返り慌ててアルファアに向かって、弁解するように手を振った。

「あ、アルファア！？ ち、違うのよ！！！ 別にギントキがいないから寂しがってるとか、そんなじゃないからね！！！」

「？ うん」

アルファアはコクリと頷いた。しかし、頭上に疑問符が浮いているということは、あんまり理解できてないのだろうけど。

私はアルファーにこれ以上説明するのは無駄と悟り、アルファーから視線を逸らした後、体軀座りに姿勢を直し、膝の上にポスと顎を乗せた。少し硬い膝の感触で冷静になろうと試みたが、ますます私の胸には苛立ちに似た焦燥感が渦巻くばかりであった。

そんな私の様子を疑問に思ったアルファーは、買い物袋を台所に置いた後、私の傍まで近くと同じように体軀座りをして座った。

私はそんなアルファーにチラリと視線を向ける。そこにはいつもの無表情のアルファーの顔があった。

「・・・・・・・・何よ？」

「・・・・・・・・ニンフ、どうしたの？」

「・・・・・・・・え？」

私はアルファーの言葉に思わず驚いて頭を上げた。

感情の起伏に乏しいアルファーがそんなことを言うなんて、と私は驚きを隠せなかったが、ここにいることでアルファーは“人間”らしい感情を身につけたのだろう。

私はそんなアルファーが無性に羨ましくなった。たとえ心から笑えなくなつて、この生活を私より長く体験したアルファーが、スケベだけど本当は優しい、あんたのマスターであるトモキと心から通じ合えて。

私はギントキとインプリンティングしたけれど、未だに彼のこと

は何一つ分らない。

本当に心から通じ合っているのだろうか？　そう思うと急に不安になる、弱い私がいた。

そんな時は必ずあの台詞が頭に浮かんだ。

『そんな出来損ないは……、廃棄処分するしかないなあ』

その台詞が浮かんだ後、私は言いようもない恐怖と絶望に苛まれ、ゾクツと背筋に悪寒が走る。

やはり……、私はアルファーとは違って何も出来ない、役立たずのエンジェロイド。それに加えて羽もなくなっちゃったし……。

こんな私と本当はギントキ……。

——インプリンティングしたくなかったのかな。

私はそこまで考えた後、震える唇を懸命に動かしアルファーに話しかけた。

「ねえ……、アルファー」

「？　何？」

「あなたは……、もし、もしよ。羽がなくなって、マスターが自分の傍から遠ざかっていったら、その時アルファーはどう行

動する？」

私はそこまで口にしたとき、心の奥底で失笑した。

馬鹿ね、こんな事聞いてないなというのかしら。

本当は自分のことなのに、アルファーに問いかけるなんて、なんて卑怯なのかしら。

しかし、当のアルファーは私のそんな企みも知らずに、真剣に考えてくれていた。どうやら言葉がまとまった様だ。

アルファーはゆっくりと閉じていた瞼を開き、いつもの無感情な瞳で、それでも真っ直ぐに私の瞳を見つめながら口を開いた。

「……例え、羽がなくなってマスターが私の傍からいなくなったとしても、私の気持ちは変わらない。私たちが出来ることは、どんなことがあっても“マスターを信じ続けること”」

「信じ続ける？」

「そう。私たちエンジェロイドはその為だけに生まれてきた存在なのだから」

私はアルファーの言葉を聞いてハッとなった。

そうだ、私はエンジェロイドして一番大切なことを忘れていた。

初めて自分を大切にしてくれるマスターに出会えて、私、すっかり舞い上がっていたんだ。

私はアルファアの言葉を聞いて、居間まで胸中に渦巻いていたものがスゥーと雲散するのを感じた。

「……ありがとう、アルファア。そうよね、私たちが信じないで、誰が信じるというのよね」

私はにっこりと笑みを浮かべたその時に、ガラガラと玄関の戸が音を立てて開き、同時に待ち望んだ声がニソフの耳に聞こえてきた。

「うおーい、ただいま帰ったぞおーい」

私はその声が聞こえたのと同時に居間から飛び出し、その人物に向かつて勢いよく跳躍し、そのまま腰に抱きついた。

「うおっと！！！　なんだなんだ、アブねえーな、おい。銀さん、お勤め帰りなんだから、少しは遠慮しろよ」

と、私の頭を撫でながら銀時はそう言った。

「フン、なら私も連れて行ったら良かったじゃない。そうしたらそんなに疲れることはなかったと思うし」

「何だ？　えらく不機嫌だな、おい？　もしや、俺がいなくて寂しかったのか？」

私は銀時の言葉にカァーと頬が紅く染まるのを感じた。まさしく凶星であつたが、素直になれない私は意地を張って憎まれ口を叩いてしまう。

「そ、そんなわけないじゃない!!! ただせつかくこの私がマスタ―に選んであげたのに、その!!!」

「はいはい、分かってるって。これからなるべく誘うようにするからな」

「本当かしら!!!」

「本当だつてば。そうだ、土産にほら」

銀時は右手に持った小さな紙箱を私の目の前に掲げた。

「あつ! それは!!!」

そう、その箱は私の大好きなケーキが入った箱であつた。

「テメエの好きな店のケーキだ。後で食おうぜ」

私はギントキが自分の好みを知っていたことに嬉しくなり、私は今まで以上の満面の笑みを浮かべ、

「はい!!! マイ・マスター」

と、勢いよく返事したのであつた。

番外編 寂しがりやなニンフさん（後書き）

長々更新が止まっていたので済みませんでした。テスト期間だったので、更新が。

これからはマメにしますのでよろしくです。

第8訓 指名手配犯は娑婆に出たがるのが本能ッ！？

「か、桂さん！！ 一体どうしてこんな所に！？」

新八は突然の訪問者——桂の姿を見て驚きの声を上げる。

新八の声を聞いて、意外にも桂は驚いた風に声を上げる。

「何でつて……、俺はリーダーに呼ばれてきたのだが」

「えっ？ 神楽ちゃんに？ 僕はそんなの一言も聞いてないけど……」

桂の言葉に新八は目を丸くし、ついで横にいる神楽へと視線をやる。

その視線に気づいた神楽は鼻をほじりながらそっぽを向いていた。その神楽に何かを感じ取った新八は目を細めた。

「……………神楽ちゃん、もしかして忘れてたとかじゃないよね？」

「……………テヘッ？」

無言の後、新八の問いを誤魔化すように、わざとらしく舌を出して頭をコツンと叩く。

「テヘッ？ じゃねえーだろがああああ！！！！ テツメ、なんでそんな大事なことに僕に教えねえーんだああああ！！！！！！！！」

「！」

「んだよー！！ いちいちうっさいアル！！ 駄眼鏡の分際で！！ 別に忘れていたワケじゃないアル。ただお前に伝えるのがめんどくさいだけヨ」

「ちょ！ なにその俺ルール！！ ってか、僕に教える云々じゃなくて、指名手配犯の桂さんが不本意にこんなところ来ちゃったら、源外さんに迷惑がかかったちゃうでしょ！！！！！！！！」

「大丈夫アル。ヅラは優秀な部下ネ。尾行されるなんてヘマはこないアル」

「何なのその自信・・・・・・・・」

新八はあまりの自信満々に嫌な予感がするのを感じたが、もうそこはあえてつつこまない様にし、放置プレイをかましていた桂へと話しかけた。

「・・・・・・・・ところで桂さん。神楽ちゃんにはどんな用事で呼ばれたんですか？」

「うむ。実はここ最近江戸の町を騒がしている“UFOが物を盗む事件”、略してUBGを知っているか？」

「知ってるけど知らんわ！！！！ 僕の周りは俺ルールの持ち主ばつかですか！！！！ なんすか、その略し方！！！！ もう読者置いてけぼりじゃないですか！！！！ てか、わざわざ略す意味もわかんねえーし！！！！！！」

「そんなに怒るな、新八君。あまりキレると頭が禿げると聞く。その年でハゲになると後々困るであろう」

うむうむと腕を組んで頷く桂。

そんな桂の様子を見て、ますます新八はキレまくる。

「そんなの今はどーでもいいんだよ！！！！！！！！問題なのはその略し方なんだよ！！！！ちゃんと略した理由を述べないと、後々困るんだから！！！！」

新八はバンバン！と机を叩きながら怒鳴る。

「ふむ、それもそうだな。“UFOが物を盗む事件”を略したのは・・・、この小説の作者の勝手な都合だ」

「ハア！？何それ！！！！オイこら！！！！作者そんなところで楽するなあああ！！！！！」

「そうアル！！！！あんま更新しない癖に偉そうにすんじゃねえ！！！！！！」

と、今まで黙っていた神楽も新八と一緒に作者を責め始める。

散々に作者を責めた二人はようやくスッキリしたのか、清々しい表情で桂に向き直る。

「それでその事件と桂さんがここに呼ばれたのには、何か関係があるんですか？」

桂は新八たちの素早い変わりように若干引きながらも、律儀に新八の問いに答える。

「ああ、実はな俺の相棒であるエリザベスが……、そのUFOにキャトルミーティングされたのだ。そこで万事屋を営んでる銀時にこの話を持ち込んだところ、一人店番をしていたリーダーに『銀ちゃんも行方不明アル』と聞かされたのでな。もしかと思い、調べたところここ数週間で数多くの人や物がそのUFOにキャトルミーティングされていることに気づき、リーダーと今後の対策を練ろうと思い、話したところ今日ここに来るよう指示されてな……」

「そうだったんですか……。エリザベスさんが……」

新八は桂の長々とした事の経緯を聞いて、しんみりとした雰囲気漂わせるが、

「あつ、そのことだけどツラ。エリザベスと銀ちゃんは全くの別件だったアル」

と、場の空気を読まない神楽の一声に、桂はピクリとその肩を震わせた。

「何だと、リーダー……。それじゃあ俺のエリザベスはどうなる？」

神楽はその問いにフツと鼻で笑い、

「……諦めな。あいつより言い奴はごまんといるぜ、ツラ

「ど」

と、哀愁漂わせた古株のデカの如く、落ち込む桂の肩に手を置き
 そう語る神楽。

そんな神楽に桂もノリノリで、

「そんな、俺の相棒はあいつしか、あのエリザベスしか．．．．．
。そのエリザベスを諦めろって言うんですか、リーダー ああああ
ああ！！！！！！ フゴオオオオオオ！！！！！！！！！！」

「うっせええええええんだよ!!!! このアホがああ!!!!」

と、蚊帳の外であつた源外と新八が桂の下顎に強烈な跳び蹴りを食らわす。その攻撃をまともに食らつた桂は奇声を上げながら、廃品をうずたかく積んである場所へとすつ飛んでいく。

ドンガラガッシャア
ンンンンンンンン
ン！！！！！！！！！

もの凄い音を立てつつ、すっ飛ばされた桂の身体は廃品の山に埋もれる。

桂が救出されたのは約1時間後であつた……。

「……さて、それでだな。要するにテムエらの話をまとめ考えた結果、そのUFOが今回の件に絡んできていると思うぜ」

と、源外は目の前に頭上にたんこぶを拵えて正座する桂と神楽、

その傍らに般若のように立つ新八を見据えて口を開いた。

「どうしてですか？ 銀さんがいなくなった原因と、エリザベスさんがいなくなった原因は全くの別なんじゃ……」

「ああ、俺も最初はそう思ったんだがな。さっきいつを調べたところ、電波に異様な波が確認されてな、調べたところ未確認飛行物体が一隻ほど、異空間に飛んだ形跡があるんだ。それはちょうど銀時が消えてから数週間後であり、最後にこの江戸で確認されてからの日数から計算すると、ちょうど辻褄が合うワケよ。つということはある、お前たちの目的は違えども、狙う敵は共通なワケよ」

「ふむ、そうなのか……。これは見事な推論だ、ご老人。もう少し若ければ我が組織に加えたものを……」

桂がウンウンと源外の推論に感心していると、不意にドンドンと玄関のドアが叩かれ、ついでいつもの聞き慣れた声が響いてきた。

「おい、桂ア……！ そこにいるのはわかってんだぞ……！ 早くここから出てこい……！」

真選組の鬼の副長である土方であった。

その声に新八はウエツと顔を歪め、桂に詰め寄った。

「ちょ、ちょっと……！ 桂さん、どういうことですか……！ 思い切り付けられてるじゃありませんか……！ あんたちゃんとまいてきたんですか……！」

「ふむ、そのようだったか……。どうやら奴らの方が一枚

上手だったようだな」

「感心してる場合じゃねえーだろうがあああ!!!!!!!!!!!!!! どうするんですか!? あんたと一緒にいたら僕らも問答無用で引っぱらえちゃいますよ!!!!!!!!!!」

新八の狼狽えように源外が助け胸を出す。

「まあまあ、慌てるな。新八、俺が何とかしてやる。だから耳を貸せ」

新八は源外へと耳を寄せると、源外はゴニョゴニョと何やら吹き込むと、新八は驚きに目を見開いたが、聞いているうちに神妙な顔つきになりコクリと頷いた。

それから何やら一枚の紙を受け取って懷にしまつと、神楽と桂を近くに寄せて源外の合図を待つ。

すると、いくら待っても出てくる気配のない桂に痺れを切らした新選組が扉を破壊して飛び込んで来たのと同時に、

「今だ、テメエら!!!!!!!!!! しっかりやれよ!!!!!!!!!!」

と、そう叫ぶのと同時に源外はレバーを下に下ろすと、一瞬の間に新八たち三人の姿はかき消えた。

新八たちが消えるのと同時に新撰組が源外の工房へと飛び込んできた。

「ご用改めである!!!!!!!!!! 大人しく投降しろ……………、つて、

あれ？」

と、刀を引き抜いて勇ましく飛び出してきた真撰組は、桂の姿がないことに目を丸くして呆けたのであった。

第8訓 指名手配犯は娑婆に出たがるのが本能ッ！？（後書き）

はい、今回はここまでです。次からは銀時たちも登場しますので。

なんか飛び飛びな説明で申し訳ありません・・・・・・。

第9訓 そんなことより、前に進もう（前編）

「——というわけなんです。そこで僕は源外さんにこれを・
・・・」

新八は桂に替わって銀時たちに経緯を説明し終わると、源外から受け取った紙を懷から取り出す。

その紙を銀時たちに見えるように広げる。

「ふうん、何々・・・」

まずザッと銀時が手紙の内容を流し読みし、その内容を手短に智樹たちに伝えることにした。

それにしても、あのじじいは只者じゃねえなあ・・・。ここまで情報を掴んでくるとは。

「なるほどね、にしても流石だな」

銀時は顎に手を置きウンウンと感心した風に頷く。

そんな銀時の様子にそらおとメンバーを代表してニンフが声を張り上げる。

「ちょっと！！ 一人だけで納得しないでよ！」

「うおっ！ 悪い悪い。にしても、あれだな・・・。真選組の登場は痛かったな」

「ええ………。まさかあんな絶妙のタイミングで真選組が乱入してくるなんて、僕たちは本当に予想外でしたよ。おかげで詳しい話も聞けませんでしたし……………」

新八は眼鏡の汚れをハンカチで拭きながら相づちを打つ。

それに呼応するように番傘をクルクルと回していた神楽も、

「そうアル。ツラを呼んだこと自体失敗だったアル。これはワタシの作戦ミスネ」

と、珍しく反省の態度を見せた。

まさかの裏切りに桂は目頭から多量の水を垂れ流して叫ぶ。

「リーダー、それはあんまりではないか！？ それに俺はツラではなく桂だッ！」

「いやいや、今回は珍しく神楽の肩を持つよ、俺は」

銀時は両腕を広げながら二人の間に割って入ってきた。

そんな銀時に神楽は目を輝かせ、桂は目をつり上げた。

「何をぬかす銀時！？ とうかリーダーの肩も珍しく持つだけなのか貴様は！？」

「ぬかすも何も、お前が真選組を誘い寄せた原因だろうが。お前が来るのがあと数時間遅ければ、俺が向こうの世界に戻る方法も聞

き出せたかもしれないってのに。本当にテメエは昔から空気がよめねえっていうか何というか」

「フン、空気が読めるもクソもないであろう。そもそもあの幕府の犬を誘い出した記憶はない。あいつらが勝手に付いてくるだけだ」

「ああ、なにそれ。菓子を買ったら勝手に付いてきたオマケのようによいよがつて。あんなうつとしいもんがオマケなら、俺は二度と菓子は買わないけど。あつ、でも、あのお天気お姉さんのプロマイドが付いてくる『スーパデラックス天気当てまプリン』は捨てがたいけど」

「ふ、何を言うかと思いきや。銀時、まだそんな乳臭いモノを食しておるのか。それだからそんなに頭が天パーになるのだ。男ならやはり人妻のプロマイドが付いてくる『人妻デラックス今日は寝かせま煎餅』であろう」

二人はいつしか互いの菓子の名前を口にし、顔が引っ付かんばかりに近づけさせ、バチバチとメンチを交じらしていた。

って、そんな菓子買っている時点で同じ穴のムジロだけだな。

そんな二人の静かなる喧嘩に終止符を打ったのは、我らが銀魂のツッコミ代表新八であった。

新八は彼らの背中に腰に下げた木刀を抜き放ち勢いよく振り下ろした。バシン！ という強い音が辺りに響き渡り、その攻撃をもろに食らった銀時たちは悶絶しながら地面を転げ回る。

「もう！ 銀さんも桂さんもいい加減にしてくださいよ！ あんた

らが喧嘩してるとこの話いつまで経っても終わらないんだから」

腰に手を当てて怒鳴る新八。背中の痛みにいち早く回復した銀時はヨロヨロと立ち上がる。

「そうは言ってもだな、ぱつつぁんよ。男には譲れねえもんがあんだよ」

「その通りだ、銀時よ……。我ら侍には己の矜持の他にも譲れないモノがある」

同じく回復した桂が立ち上がり、銀時の言葉に賛同する。

「で？　そこまでして二人の譲れないモノとは何なんですか？」

新八の問いに二人はニヒルに笑い、

「それはだな……………」

その真面目な表情からこれは冗談ではないと悟り、この場にいる全員が息を吞んで二人の次の言葉を待つ……………が。

やはり、あの二人はどこまで行っても変わらなかった。

「お天気お姉さん」

「人妻」

ある程度予想はついていたけど、まさかこれほどとは思わなく銀

時たち二人を除く全員（イカロス、守形、会長は除く）がずっとこけた。

そんな二人を新八と神楽が無言のまま完封なきまでに叩きつぶした。

男二人の絶叫が森を突き抜けて麓の村まで響いたという。

余談だが、村の者はこの叫びを聞いてモンスターだと思って恐れおののいたそうだ。

——数時間後。

銀時に任せたらいつまで経っても話が前に進まないの、新八が銀時の代わりにみなに説明することになった。

銀時の手から奪い取った紙を広げつつ、分かりやすく説明を開始する新八。

「でね、源外さんが言うにはこの天人が僕たちの世界の人間や動物などをキャトルミールディングして、このモンモンハンターにゲームキャラとして送り込んでいるのではないか？　ということらしいんだ。その証拠に源外さんの異空間転送機……、名前は忘れたけど、その機械がキャッチした電波を辿って来たところここに転送された——、つまりここは奴らの基地ということになるんですよ」

「……ようは体のいい隠れ蓑というわけですか」

新八の説明を聞いたイカロスは簡潔に述べる。

「そうその通りです。流石ですね」

イカロスの完璧な説明に新八は素直に褒める。

「ふう〜ん、その宇宙人中々やるじゃない。ようは誰の手の届かない電子世界へ身を潜めたってワケね。それにこの手のゲームは容姿とか名前とかを好きに変えられるから尚更よね」

ニンフの言葉を聞いて、隣に座っていた智樹が不思議そうに首を傾げる。

「お前未確認生物の癖に妙に詳しいよな……」

「何よ、私は電子専用のエンジニアロイドよ。機械なんかあたしの手にかかればちよちよいのちよいよ」

と、ない胸を張って自信満々に答えるニンフ。智樹はニンフの薄い胸を見てハア〜と溜息を漏らす。
その様子を見てニンフは可愛い瞳を吊り上げらせる。

「な、なによ！ その溜息は！ 何か腹がたつんですけどッ！」

そんなニンフにボンと神楽が手を置いた。その妙に生ぬるい視線にニンフも何故か気まづくなる。

「な、何よ……」

「フツ、何も言うな。ワタシには分かっているアル」

神楽はそれだけ言うと、手を振ってその場から去った。神楽の後ろ姿を目で追っていたニンフは、ふと虚しくなつて己の薄い胸を抱きかかえながら地面に突つ伏した。

ニンフが戦闘不能になつたところで、今度は守形たちが話に加わつてきた。

「ところで、新八とやら」

「はい、何でしょう？」

眼鏡のフレームを押さえながらズズイと顔を寄せてきた守形に、新八は若干顔を引きつらせながら答える。

「その天人たちをあぶり出す方法はあるのか？」

「ああ、実はそのことまでは考えてないんです……」

「そ、そうなんですか？」

新八の言葉にそはらが不安そうに表情を曇らせる。

「ええ、すみません」

新八がすまなさそうに頭を下げると、意外にもあの会長が助け船を出した。

「眼鏡君、会長、いい作戦を思いついちゃったんだけど」

と、手を挙げながらにこやかに笑う会長の姿を見て、智樹たちそ
らおとメンバーは顔を苦々しく歪めるのであったが、新八だけは救
世主を見るかのように、実にキラキラとした瞳で彼女の姿を見上げ
ていたのである……。

第9訓 そんなことより、前に進もう（前編）（後書き）

はい、今回はここまで。今日は二本続けて更新しました。
さてさて、会長の思いついた作戦とは何なんでしょうか？

そろそろ後半に入りますのでよろしくお願いします。

第10訓 そんなことより前に進むわよ 後編

会長の発言に冷や汗を流したのは、智樹たちそらおとメンバーであつた（勿論、イカロスと守形は除くが）。あの戦略エンジニアロイドであるニンフでさえも顔を青ざめる始末。

そんな連中の様子を見た銀時たちは、怪訝そうな表情で会長に問いかけた。

「あゝ、ちなみによお。テメエが言ってる作戦とはどう言つた内容なんだ？ あいつらの反応を見る限りとても平和な方法ではないと予想はつくが」

「うふふ、まあ、銀髪天パー教師の言うことにも一理あるわね。でも今は手段を選んでいられるほど余裕はあるのかしらね。会長は別にどっちでも構わないわよ。あなたがその恰好を望むのであればだけど」

ウグツと銀時は会長の容赦ない言葉に呻く。

た、確かに……。あまり時間はねえんだよな。こうしている間にもあいつらこのゲームをクリアして、この電脳空間からいなくなつてるかもしれないし。

そうなつたら俺はずつとこの姿のまま。

い、イヤだ——ッ！——ぜってえええい！！俺のアナログステイック取り戻してやんかなー！！

銀時はいつになく真面目な表情で会長の作戦を飲むことに決めた。勿論、桂も同じ考えのようであった。それもその筈。桂もエリザベスという大事な人質がいるのだから。

「……いいぜ。その作戦とやらを聞こうじゃないか」

「……フツ、俺も異論はない。会長とやらの作戦を飲もうではないか」

「ちょ！？ 本気なのか！？」

智樹が銀時の発言に白目をむきながらそう叫ぶ。

「ああ、本気も本気。マジに本気だぜ。侍はな、一度言ったことは絶対に曲げねえ」

と、銀時は智樹の目を真っ直ぐに見据えて決意も固く言い放つ。その後ろでは同じ考えなのか、桂がウンウンと頻りに首を頷かせていた。

「俺も銀時の意見に賛成だ。あいつらは同じ場所には長く留まらない。なら、多少手荒な作戦を取る方が、我々には利だと思っただ」

と、淡々と語る桂。流石攘夷志士たちのトップであるということだが、その迷う事なき意思の高さから窺えた。

「うふふ、分かったわ。みんなよく耳の穴をかつぽじって聞いてね」

と、会長は静かな微笑を浮かべてそう言つと、グルリと視線を動

かしてみんなの姿を見渡す。

智樹たちはゴクリと唾を飲み込みながら、会長の口から出る言葉を待ちかまえる。一方、銀時たちは吞気そうな表情で会長の言葉を聞こうとしていた。

「そのゲーマー星人とやらは、この電腦空間にいることは間違いないのよね？」

「ええ、それは間違いないはずです。この電腦空間のどこかにいることは間違いないはずです」

と、会長の問いに答える新八。

新八の言葉を聞いた会長は、その問いに満足そうに頷くと、ウフフと実に楽しそうな笑い声を零す。

「会長が思うにはね、いちいちまどろっこしいことをしないで」

会長は空を仰ぎながら弾むような声で区切ると、皆の顔を再度見回した。にこやかではあったが、どこかその背後に黒い、そう例えるならダークマターのようなオーラを放っていた。

「この世界を完膚無きまでに滅ぼしてしまえば良いんじゃないかしら」

「……………」

会長の放った一言に、智樹たちはおるか銀時たちまで言葉を失い固まってしまう。

まさか会長のいうアイディアがここまでとは思っていなかった銀時たちは、彼女のアイディアを飲むべきか迷い始めた。

しかし、ただ一人……、そう。大食いチャイナ娘である神楽だけは、会長の言葉に瞳を輝かせながらそのアイディアに賛同していた。

「すっごいアル！！ 流石姉御は言うことが違うネ！！」

「あら？ あなたも分かるクチね。なら、早速……」

と、会長は言うが否やどこから取りだしたのか、手には対戦車ライフルを手に持っていた。同じく彼女に続くように神楽も手にした番傘を銃で撃つかのように構えていた。

最強のコンビの誕生にみな血相を変えて止めに入る。

「うおい！！ お前らはコンビ組んじゃダメだって！！」

「そうですよ！！ 下手したらこの世界どころか、僕たちまで滅んじゃいますから！！」

「そうだぞ！！ リーダー！！ っていうか、リーダー！！ この俺とコンビ組んでいるというのに、余所の女に走るなんて！！ お母さんは許しませんよ！？ そんな女認めないからね！？」

その光景を見た神楽がますます目を輝かせる。

「すごい、すごいアル！！ さっすが姉御ネ！！ ここまでやるなんて、ワタシもの凄く感心したネ！！」

「うふふふ、良い子ね。神楽ちゃんは。じゃあ、ついでにこの世界を滅ぼしちゃいましょうか？」

「ウイッス！！ 姉御！！」

ジャキン！！ と番傘を構えながら会長と並んで前へと進んでいく神楽。

二人の背後には燃えるように赤い夕日が、二人を明るく照らすように空に浮かんでいた――。

「…………だから、テメエらはコンビ組むなって言ってるだろーが
ああああああ！！」…………

倒れていた面々はガバツと顔を上げて、背を向けて前々へと進む二人に向かってそう絶叫したのであった。

第10訓 そんなことより前に進むわよ 後編（後書き）

短いですが、今日はここまで。次回からはついに真選組が登場します。さて、誰が出てくるでしょうか？

それは次回のお楽しみということで。

あっ！！ でも、要望があればその通りにしますので、是非是非感想の所を書いてくださいませ。

それではまた次回に。

第11訓 次にやってきたのはサディック星の王子とDM忍者

さて、どうにかこうにか電腦空間を侵略しようとする会長と神楽を説得した銀時たちは、ひとまず情報収集するためそこいら辺を探索することにした。

森の中をあてもなく歩いてから早一時間の時間が過ぎた。どこまで歩いたらいいのか、どこまで進んだら人の姿が見えるのであろうか？ 銀時たちは緊迫した面持ちで森の中をひたすら進む。

それから数十分後、最初の脱落者が出た。

水色ツインテール少女——ニンフであつた。

彼女は頬を膨らませて、幼子のように駄々をこねて暴れまわった。

「あ~~~~、もう！！ 疲れた疲れた！ つ~~~~れ~~~~た~~~~！！」

「……駄目よ、ニンフ。我俣を言っでは」

と、同僚の所業を見かねたイカロスが窘めるが、ニンフは聞く耳をもたない。

「ふん、何よアルファーたら。一人だけいいかつこしてさ。私だつて羽が使えたらこんな文句言わなかったわよ！！」

ブーブーと文句を垂れるニンフ。そんなニンフを見つめていた神楽はにまゝと笑い、地面にへたり込むニンフを軽々と片手で持ち上げる。

いきなり神楽に持ち上げられたニンフは驚きの声を上げる。

「ちょ、ちょっ！？ いきなりなにすんのよ！！」

「何って、オマエが駄々こねるから仕方なく運んでるアル。感謝しろヨ」

と、すまし顔で言う神楽。

それからまるでブンブンとヌイグルミを振り回すように、ニンフを振り回す神楽。ニンフは悲鳴を上げながら神楽の成すがままであった。

神楽に振り回されるニンフを見かねたのか、黙って見ていた銀時が助け舟を出した。

「おい神楽、いい加減にしろ」

「うわっ！！ 何アルか！！ 銀ちゃん！！」

神楽は銀時に急に頭をしばかれた衝撃に声を上げ、振り回していたニンフをそのはずみで地面へと落としてしまう。地面へと墜落したニンフはプギュ！と可愛らしい呻き声を上げて悶える。

銀時はそんなニンフを器用におぶさると、神楽たちを促しながら先へと進むことにした。

それからまた数時間ほど歩くと深い森を抜け、一行が次へとやってきたのは霧深い岩山地帯であった。辺りにモヤった霧が渦を巻くようにして広がり、銀時たちの視界は悪くなる一方であった。

「ったく、よく見えねえーな……。っていつか、この展開前にもあったような……」

「ああ、そうでしたね。たしか伝説のMを探しに行つて、本物のMに遭遇しちゃいましたし……」

と、似たような体験をしている銀時、桂、新八、神楽はうんうんと頷いた。

そう、以前ゲーマー星人に体をドライバーに変えられた際に伝説の男『M』に会うため、この様な霧深い崖へとやって来た時に、本物のMに会ったのを思い出していた。

あー、今回は会いたくないなあー。

銀時たちは遠い目で曇った空を見上げる。

しかし、天はそんな銀時たちのささやかな願いを足蹴にした。

数キロほど離れた場所から、獣が低く呻くようなどもり声が響き、何も知らないそらおとメンバーはおびえ騒ぎ立てる。

「な、なんなんだ！！ あの不気味な声！！」

「……マスターは私が守ります！！」

ギヤーギヤーと騒ぐ智樹を守るように前に躍り出るイカロス。

「ふむ、あの叫び声は古代に滅んだとされる類人猿の類であろう。
新大陸発見に有益な情報やもしれないな」

「あらあら、相変わらずね」

と、眼鏡を光らせ冷静に分析する守形に会長。そはらにいたってはオロオロとうろたえるばかり。その度に彼女の豊満な胸がポヨン！ポヨン！と揺れ動く。

その様子を目を血走らせて見つめる男4人（銀時、新八、桂、智樹）。

（お、おい！！　なんだあいつの胸はよお。あんなのアリか？　アリなのか！？）

（そ、そうですね！！　あんなたわわに実った胸、僕はグラビア雑誌でしか見たことないですよ！？）

（うむ、確かにあれは非常にけしからんな。子供なのにあのような暴虐な胸を所有しているなど。あれは人妻に備わっていればなお魅力的なのだな）

（さすが桂さん。あんたも分かるクチツすね！！）

と、男同士肩を寄せ合ってコソコソと内緒話を繰り広げているのを、女性陣はまるで汚らしいものを見るかのような目つきで睨んでいた。

しかし、不穏な雰囲気遮るかのようにあの恐ろしげな呻き声は響き続け、銀時たちはこめかみに米印をつけながら声のするほうへと一気に駆けつけた。

その速さときたら、エンジンロイドであるイカロスさえも追いつけないほどだ。

土煙を上げながら銀時たちは呻き声の発信源へと急ぐ。急勾配の崖をダッシュで駆け上ると……、そこにはアブノーマルな世界が広がっていた。

「おらおら、泣いてみるよ。このメス豚があー!!」

「ヴー、ヴー、ヴーー!!（ざけんじゃないわよ、このクソガキがあー!! わたしは銀さんにだけいたぶられればいいのよ!!）」

と、木の上に拘束されながらぶら下がっている女くの一猿飛あやめと、真選組の一番隊隊長である沖田総吾がその体に鞭を当てながらニヒルに笑っていた。

その光景を目の当たりにした銀時たちはズコオーと派手にスライドした。

後から来たそらおとメンバーも目を丸くし、智樹一人だけが奇声を上げながら興奮していた。

「うおー!! マジで!? 俺始めてSMプレイを見れたぜ!! うっひょー!! いいもんだなブベツ!？」

と、鼻血を噴出しながら叫んでいる智樹の頭にチョップを食らわ

すそはら。その衝撃に智樹は派手に地面へとめり込む。

その音に気づいた総吾が銀時たちのほうへと視線をやる。

「ああゝ、旦那。久しぶりでさあゝ。いったい今までどこに行ってたんブヴォワァー!!」

「テメエはなに涼しい顔で特殊プレイしてんだゴルァ!!!!」

ズシャァァァァァァァァァァ!!!!

と、目を逆三角形にした銀時と神楽が総吾の後頭部に蹴りを入れる。

総吾は派手に砂煙を上げ、ゴロゴロと転がりながら岸壁に突っ込む。

すると、吊り下げれていた猿飛あやめが勢いよく跳ね起き、

「銀さん!! そいつより私に!! 私をぶって!! お願いします!!」

と、真剣な表情で頼むさっちゃんに、銀時はお望みどおり渾身の力を込めて張ったおした。

「ああああゝ!! いいわあ!! もっと、この私をぶちなさい!! あなたの糧が私の糧になるのよお!!」

と、異様すぎる光景にドン引きながらも、何故か目を放せないそらおとメンバーなのであった。

第11訓 次にやってきたのはサディック星の王子とドM忍者（後書き）

今日はここまでです。なんかえつと更新できなくてすみません（汗）

これから気をつけて更新したいと思いますのでよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3807u/>

銀色のおとしもの

2011年11月2日15時53分発行